Vol.15 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



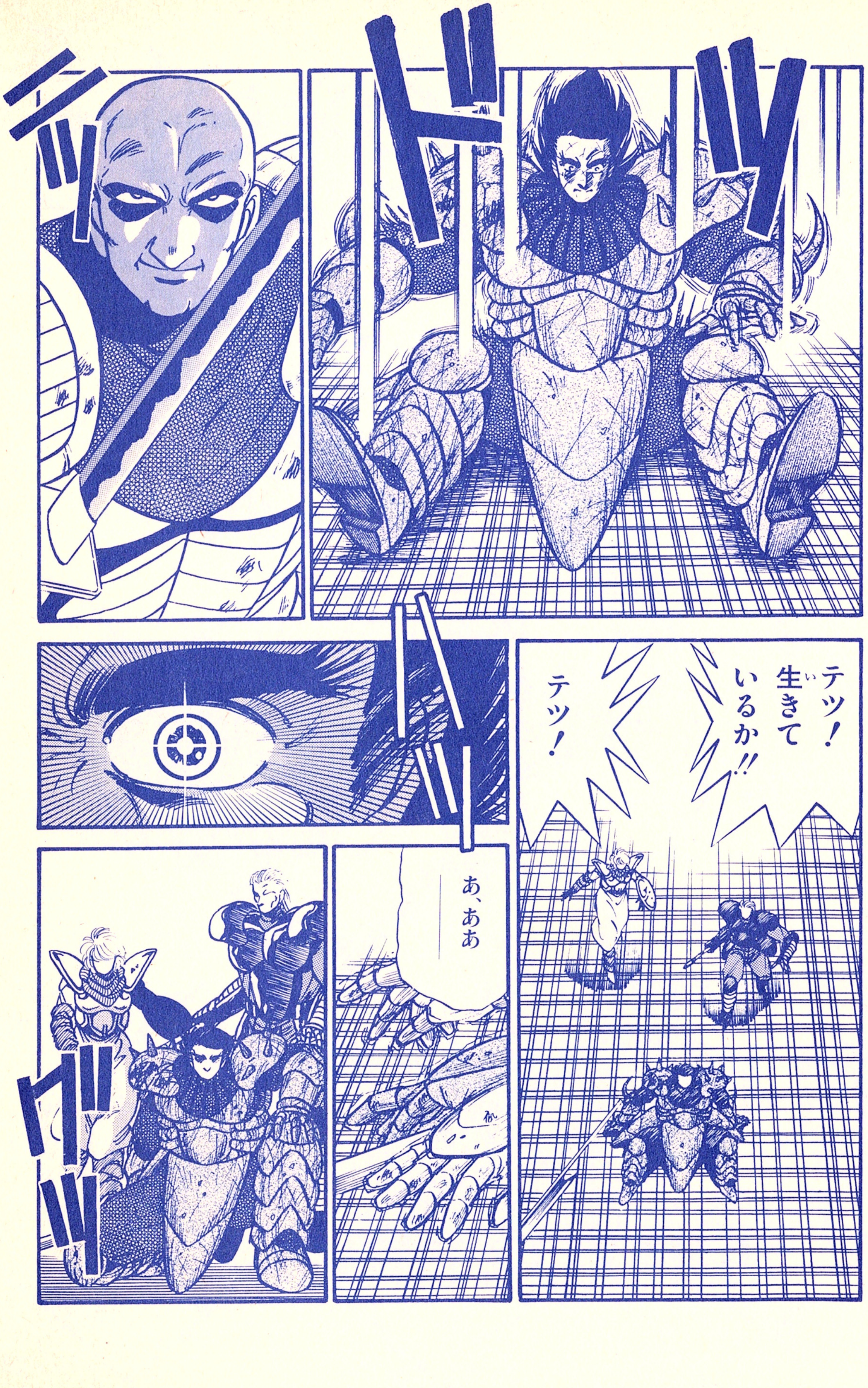
コミックと小説のコーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!!そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

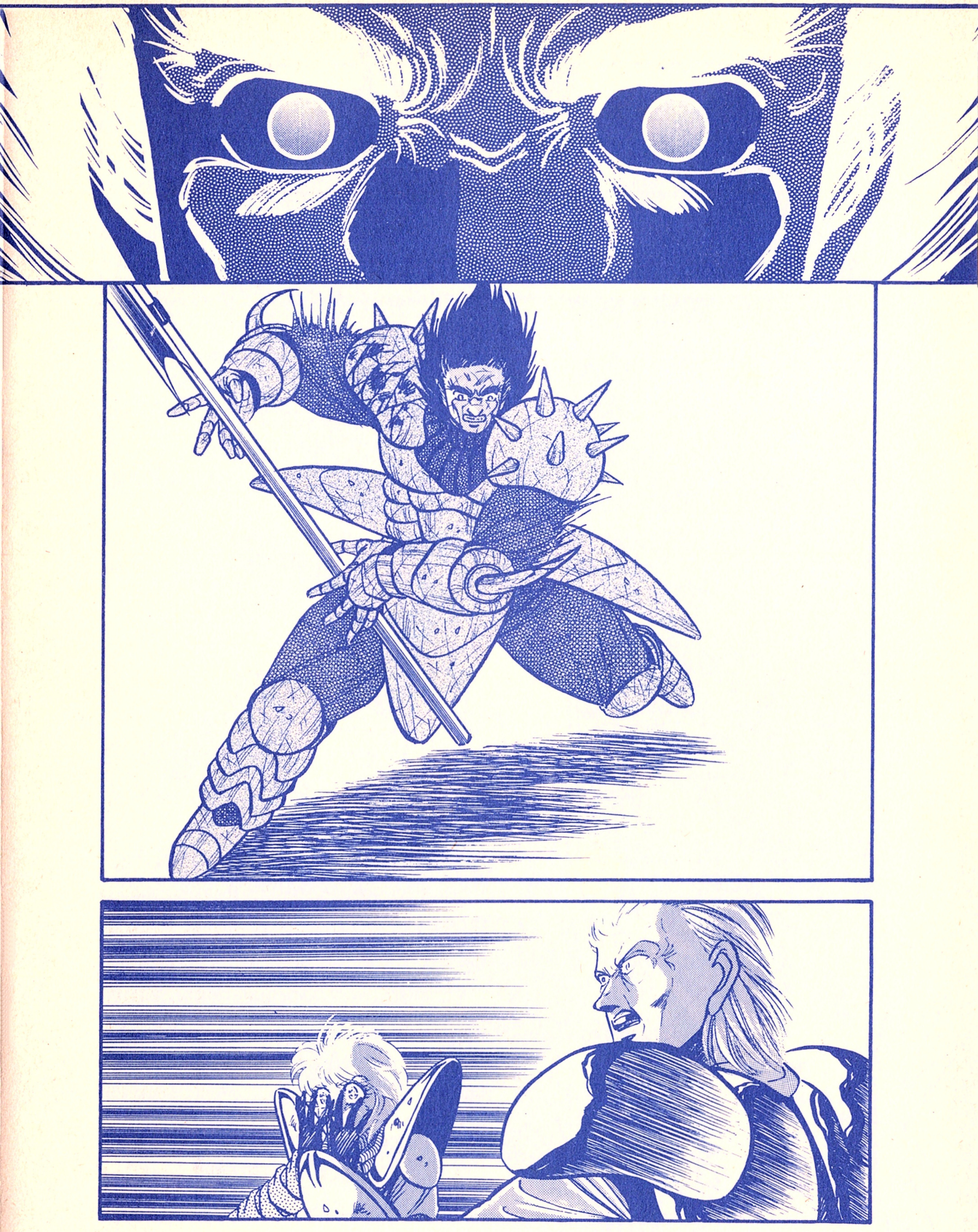
CONTENTS

FANTASY LAND


Wizardry®
ウィザードリィ外伝 第2部
鳳凰の塔
第11話「強敵」作/石垣環


ドッ
ジッ
テッ！
生きているか!!
テッ！
あ、ああ
ワッ

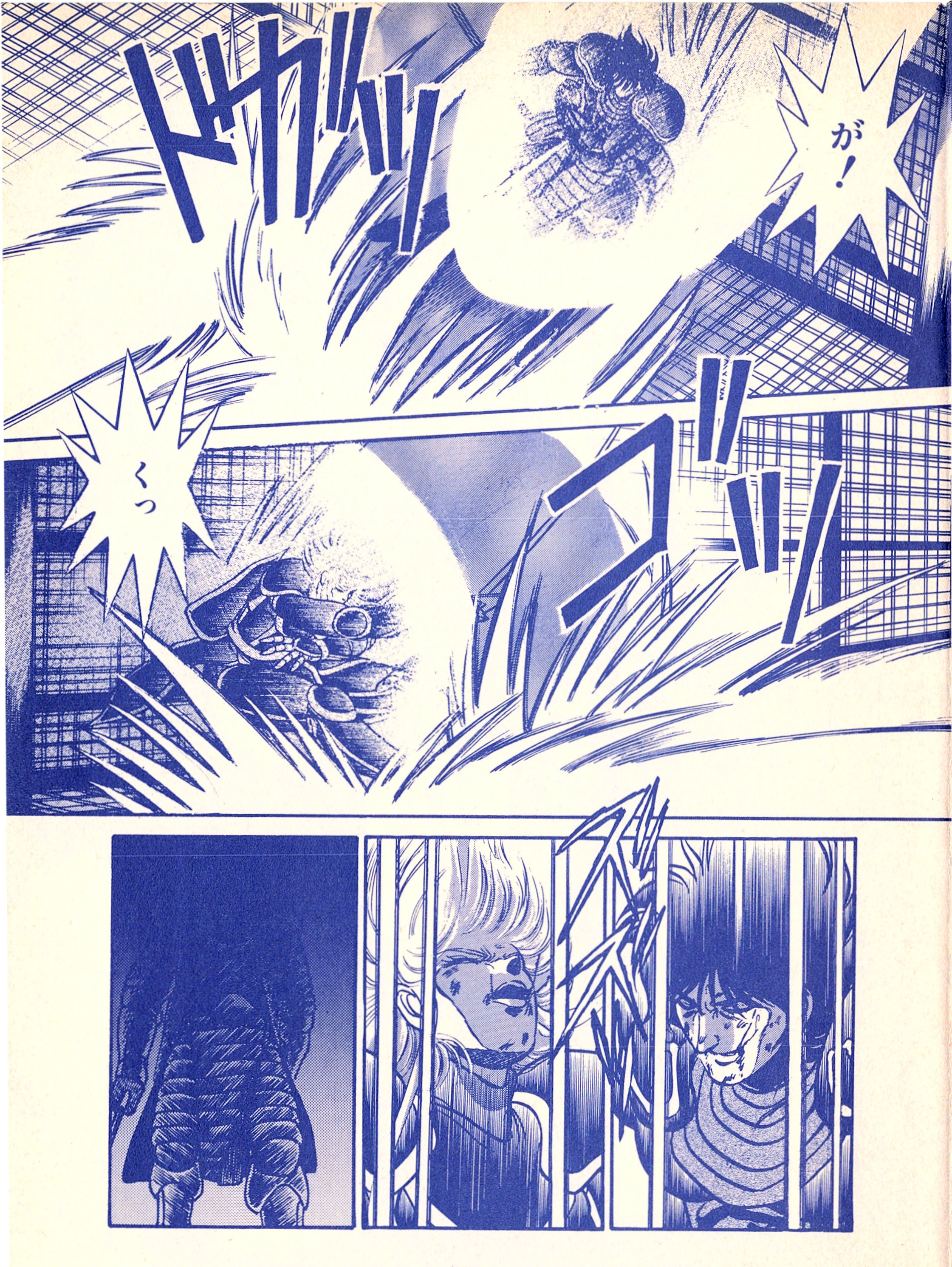

何てことはないさ
妙だな
損傷が少な過ぎる
どうした どうした 来ないのか?
何だと!
クソ! 舐めるのもいい加減に





渦旋斬(かせんざん)！
双波斬(そうはざん)！




が!
ドガッ
ゴッ
くっ

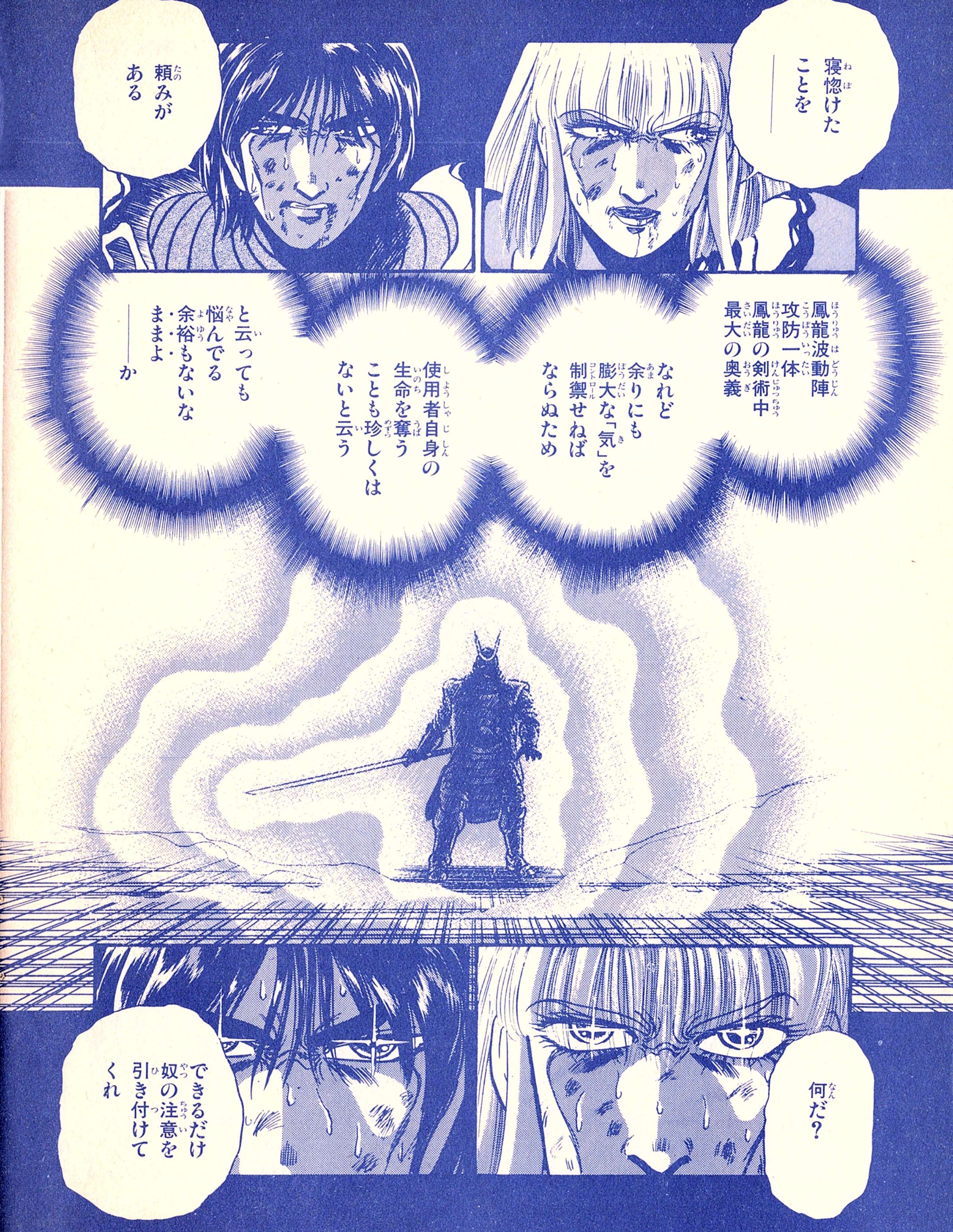

「波・撃・弾 斬・陣」 鳳龍の剣技 この五つに大別されり
「斬」には三つの禁じ手あり——
兄上もう下がれませぬ……
ショウよ
また同様に「陣」なる技も用いることを禁ずるものである——
まだ「陣」は教授されてはおらぬな
ハ、ハイ

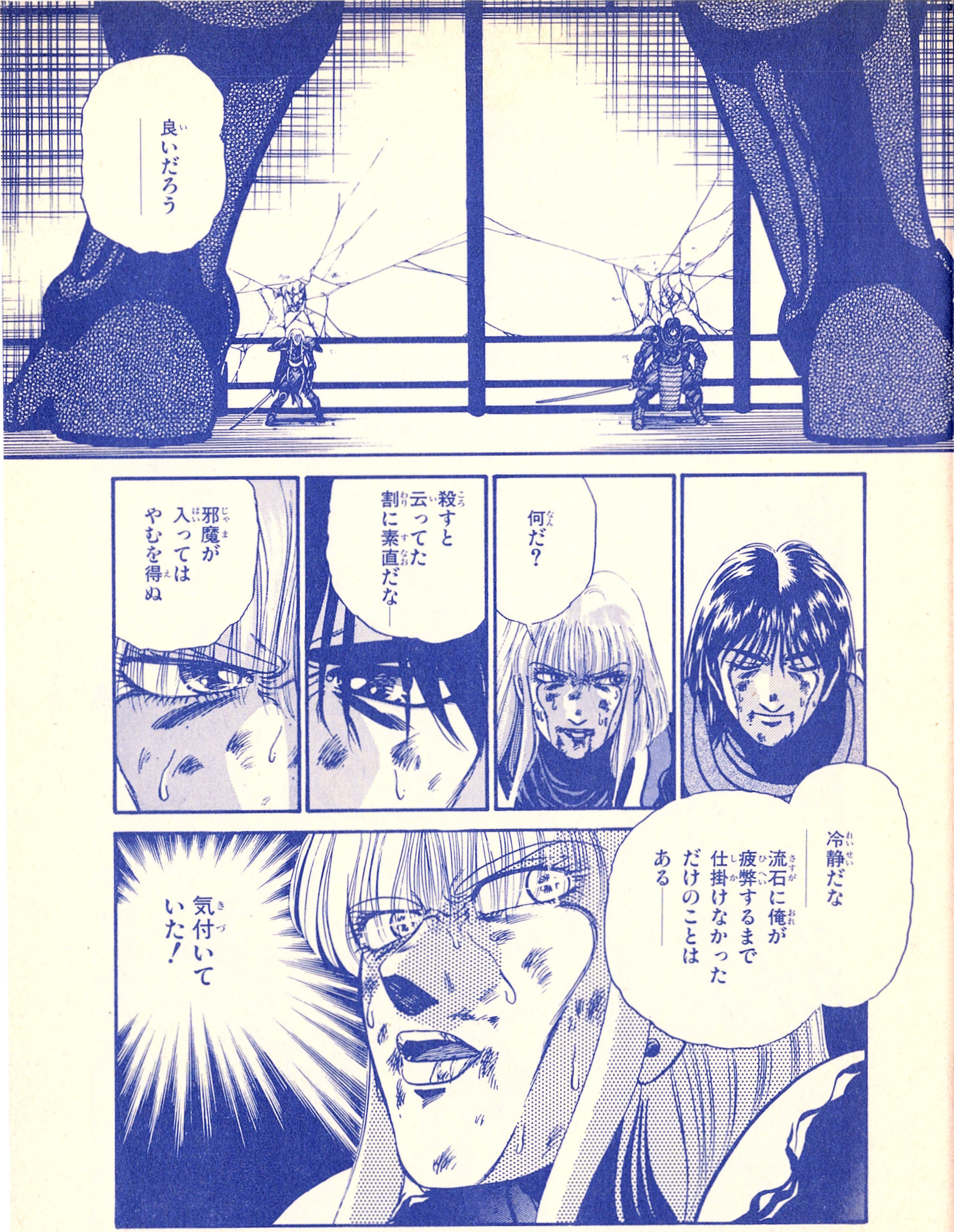


かつて「陣」を呼称されし奥義二種あり
ならば今ここで私が――
一方は侍には不向きゆえ喪われ――
今一つは伝承も可なれど
伝授しよう
良く見ておくのだぞ
あ、兄上
その才で見事会得せよ!
私の見せる最期の奥義を!
実戦に用いることは

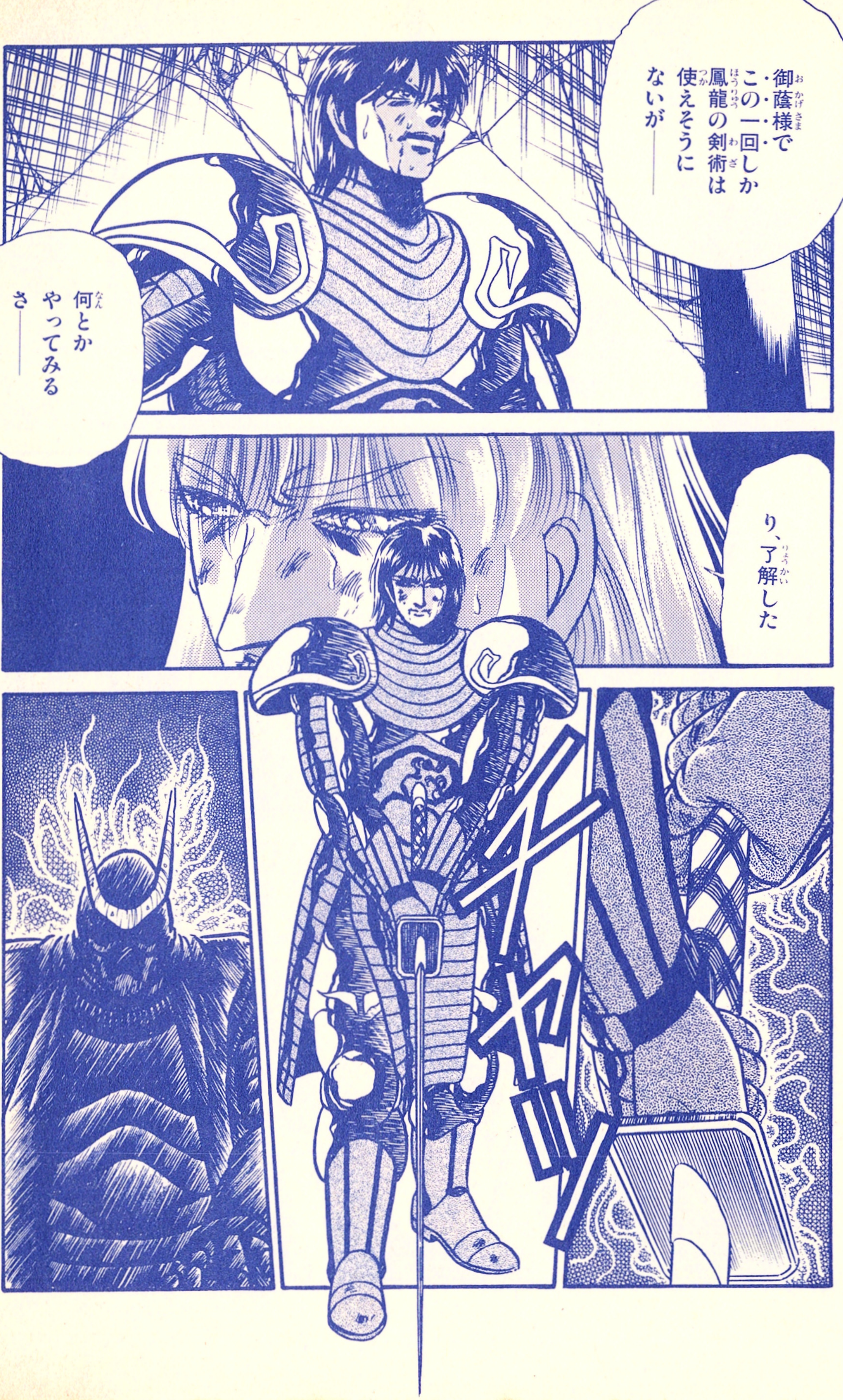

兄上！
固く禁ずる、ものである
目を醒ませ！ショウ!!
――！
くっ…
な、何をしている――

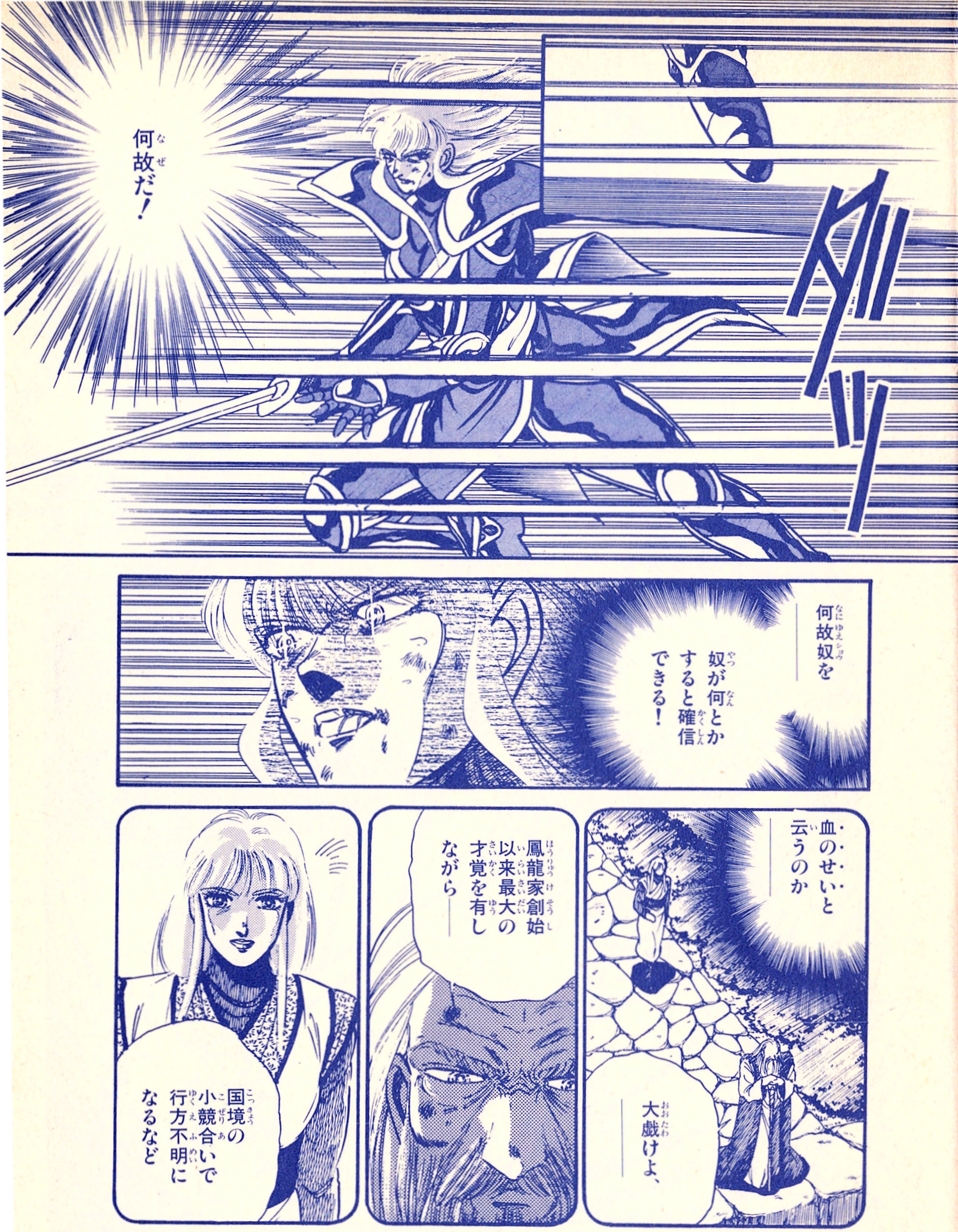

情けない夢か…
兄上—
「波動陣」か
「波動陣」!?
使用者の九割以上は消失すると云われる
バカな
生身の肉体を持つ者ならば消失もしようがな………
何だそれは
いや——
技さえわかれば対処の方法はある


寝惚けたことを——
頼みがある
鳳龍波動陣　攻防一体　鳳龍の剣術中最大の奥義
なれど余りにも膨大な「気」を制禦せねばならぬため
使用者自身の生命を奪うことも珍しくはないと云う
と云っても悩んでる余裕もないな・・・ままよ——か
何だ？
できるだけ奴の注意を引き付けてくれ

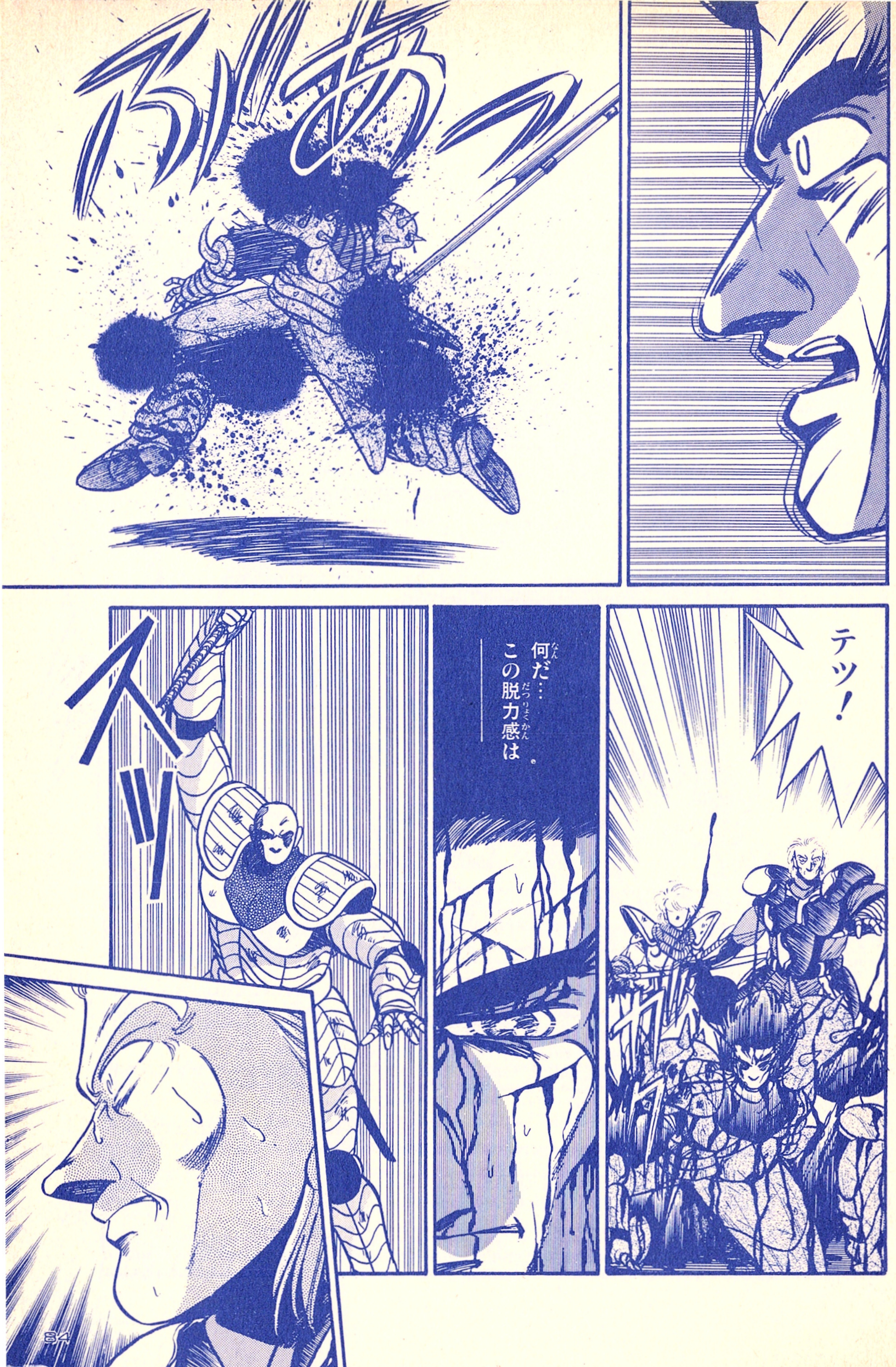


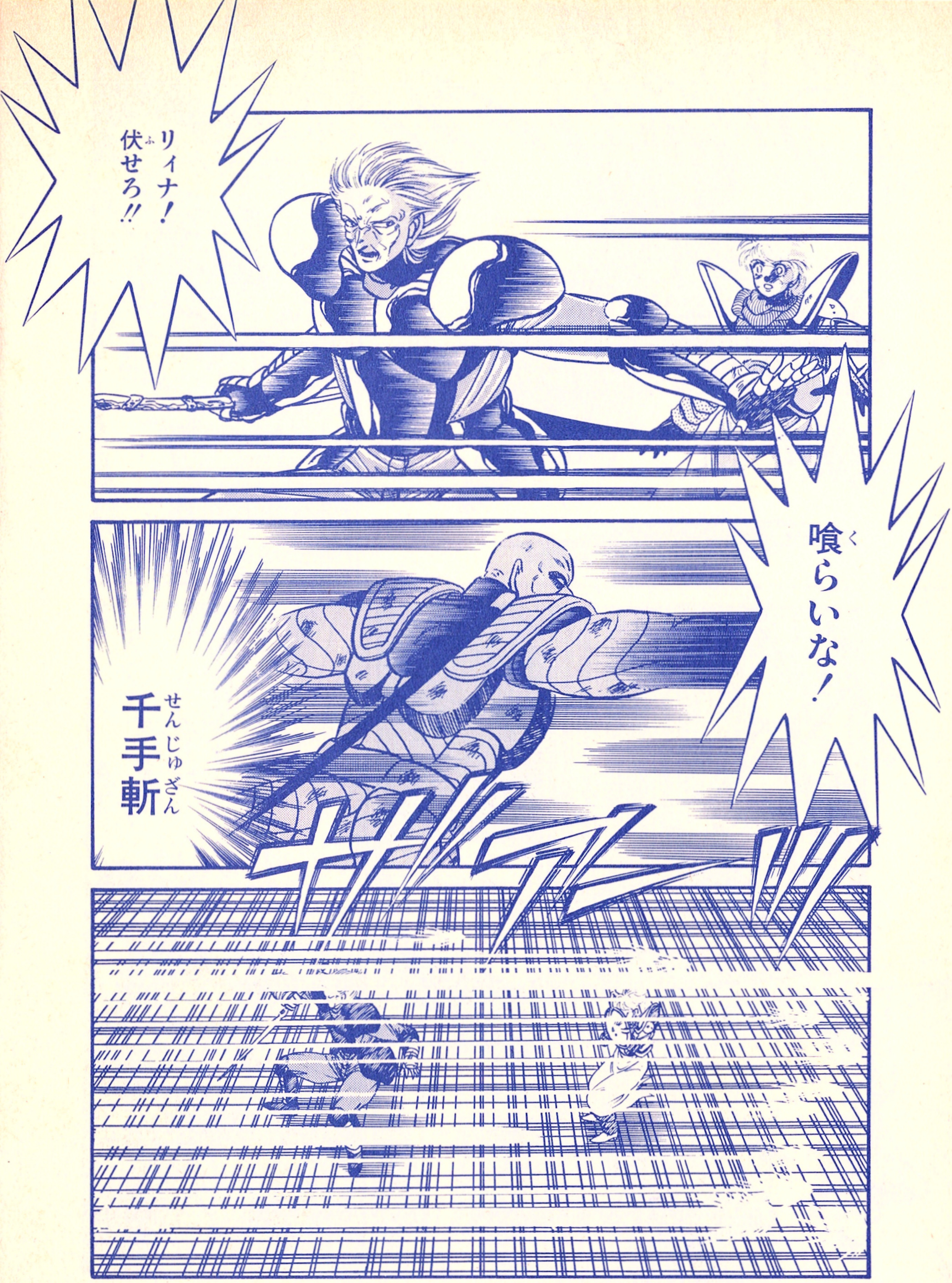
良いだろう――
何だ?
殺すと云ってた割に素直だな――
邪魔が入ってはやむを得ぬ
冷静だな―― 流石に俺が疲弊するまで仕掛けなかっただけのことはある――
気付いていた!

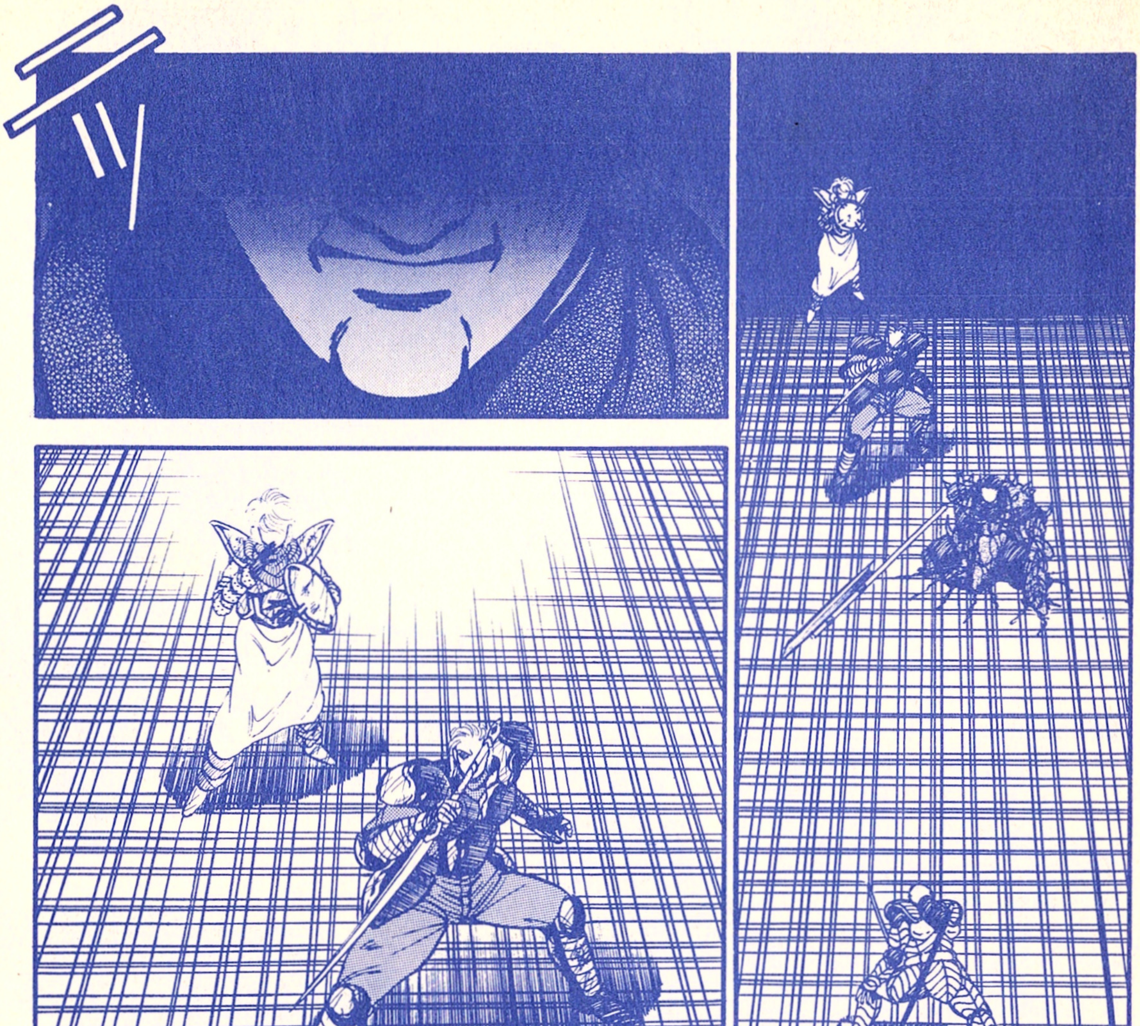

御蔭様で・・・この一回しか鳳龍の剣術は使えそうにないが――
何とかやってみるさ――
り、了解した

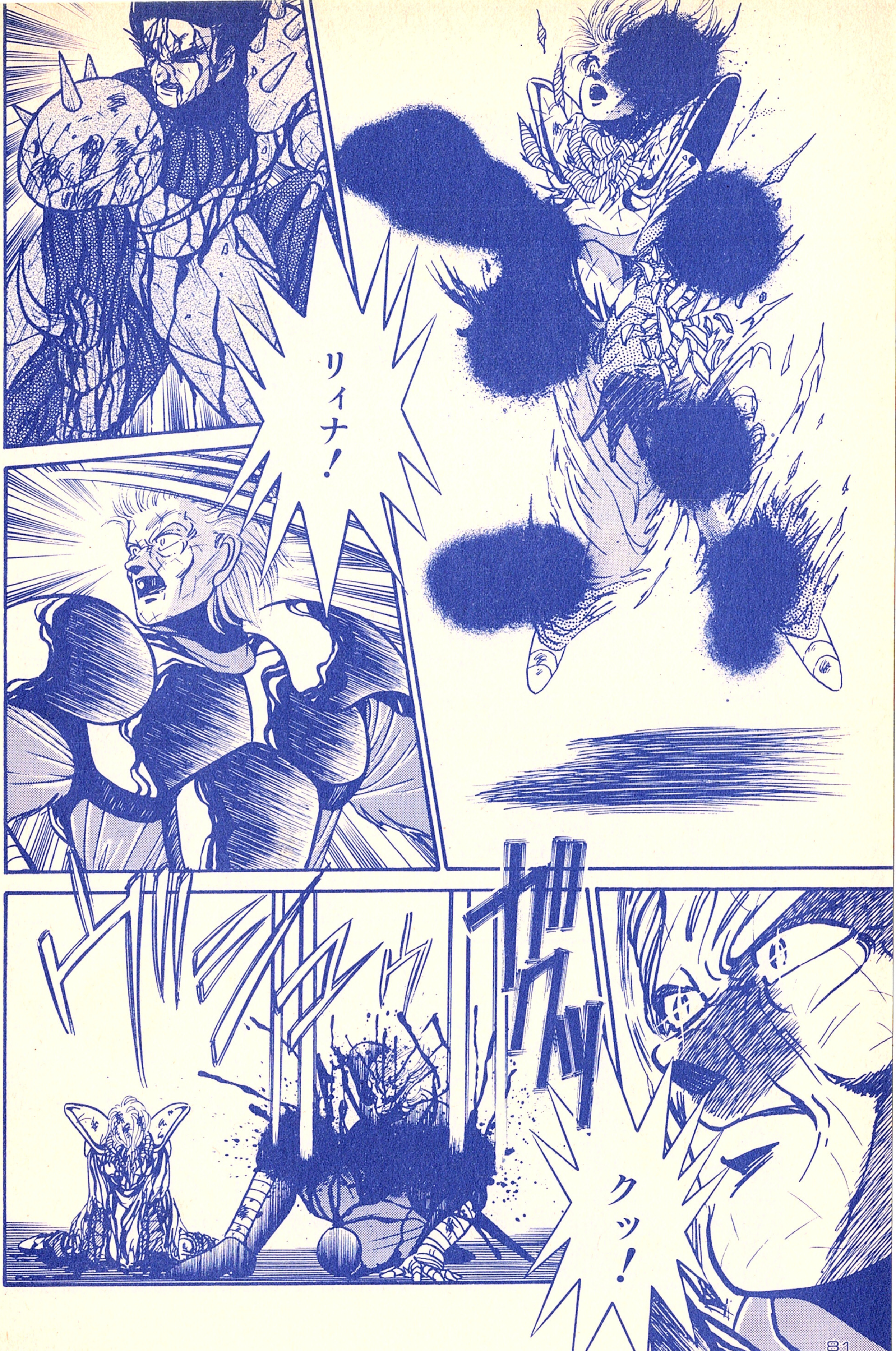

ダッ
何故だ！
何故奴を
奴が何とかすると確信できる！
血・の・せ・い・と云うのか
大戯けよ、
鳳龍家創始以来最大の才覚を有しながら——
国境の小競合いで行方不明になるなど


鳳龍
今はこのもう一人の使い手を斃さねば
我が想い果たすことも適わぬ！
烈風斬！


テッ！
何だ…この脱力感は。

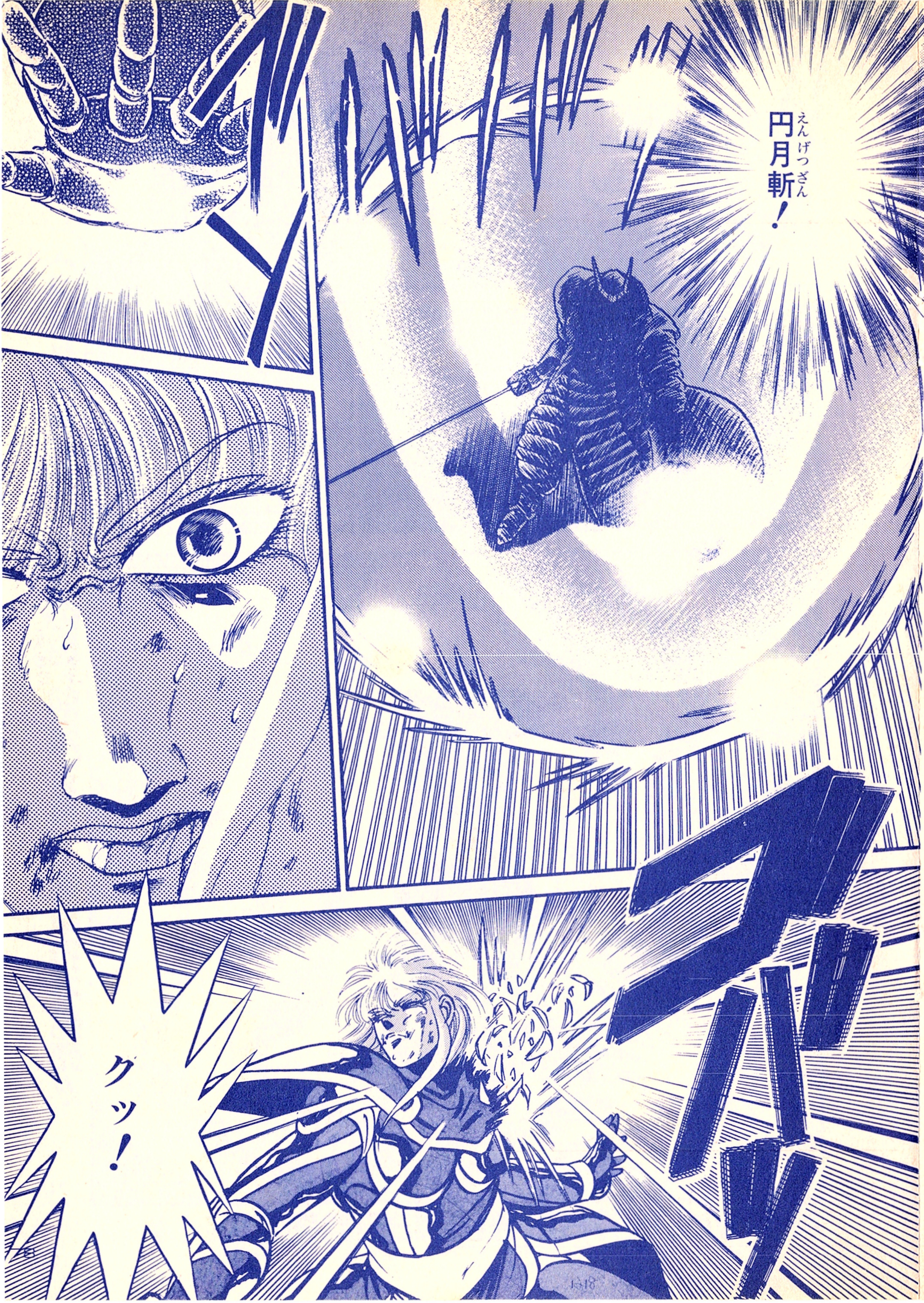

リィナ！伏せろ!!
喰らいな！
千手斬

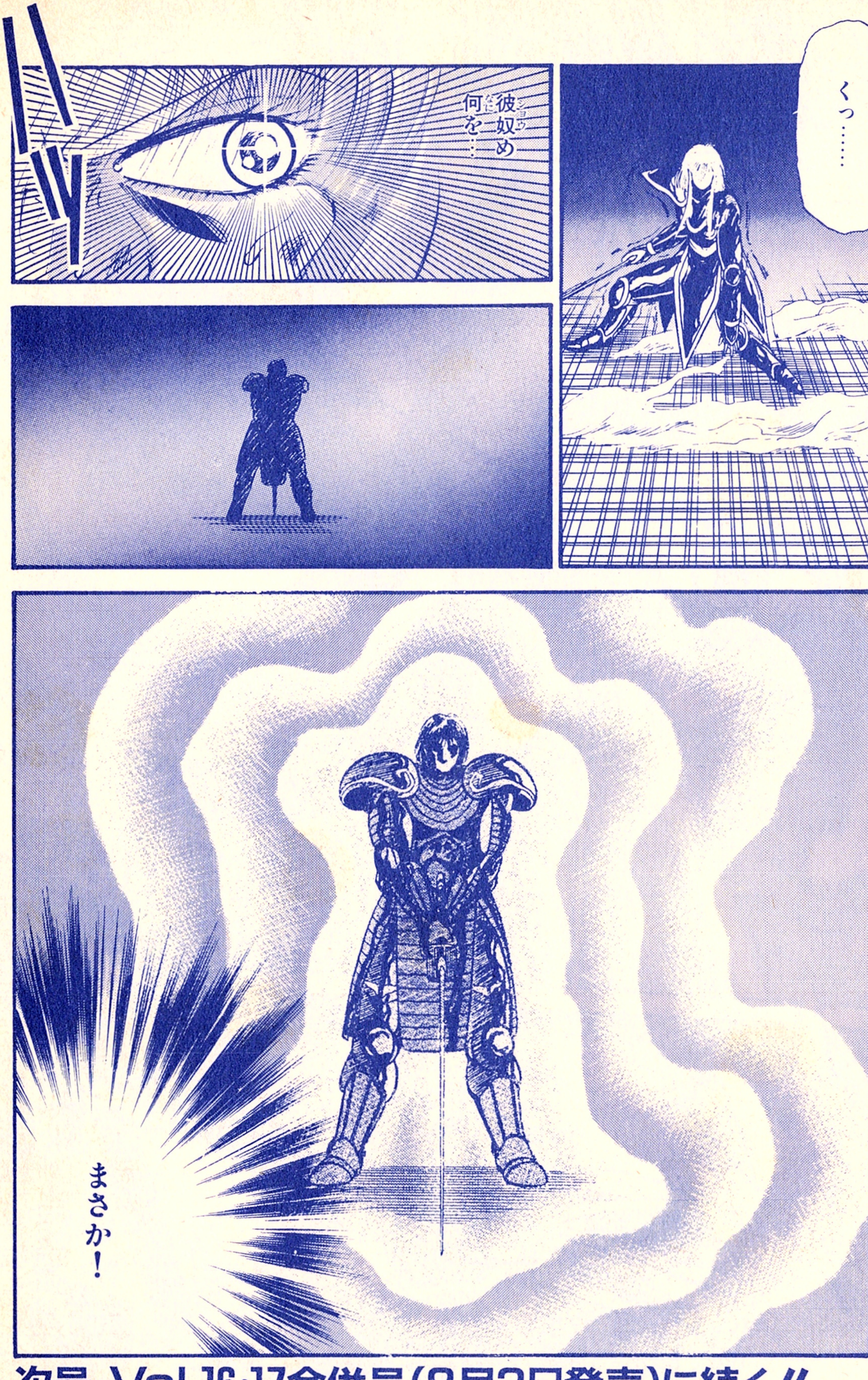

ニッ
サ……
ピッ


リィナ！
クッ！


ケイヒから伝授された鳳龍の秘技「千手斬」の味はどうかな・・・
この一撃で斃すほどの威力はねェが
無数の切り口から流れ出る血は並の量じゃねェのよ
動けば動くほど体力は目減りし
苦しみながら力尽き果てる
オレに相応しい剣技よ
加えて使用する「気」の量も少なくて済むから
結構繰り出せるのさ


わかったか
忍者野郎
スッ
それ！
それ!!


円月斬(えんげつざん)!
クッ!

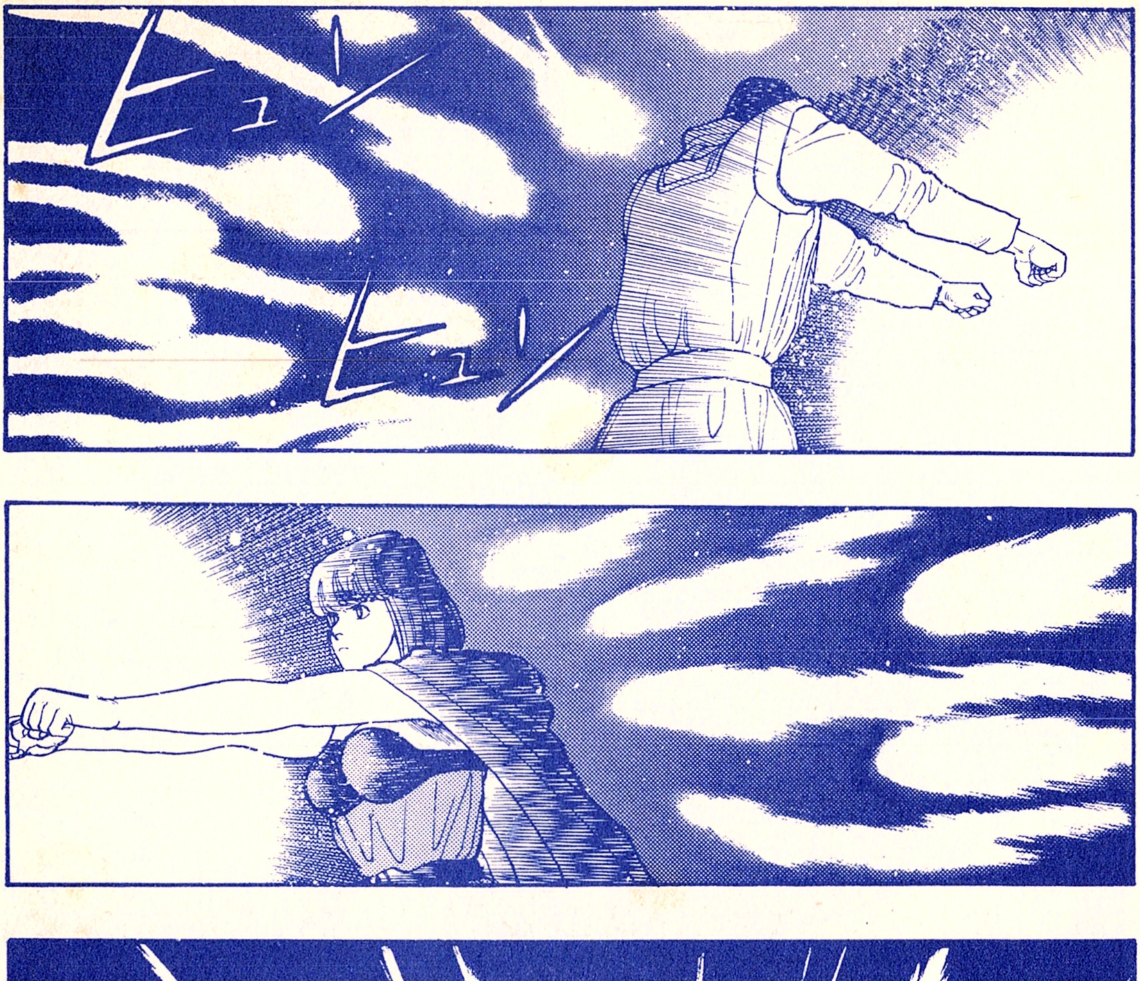


ウィズ外伝第2部「鳳凰の塔・前編」8月上旬単行本発売!!

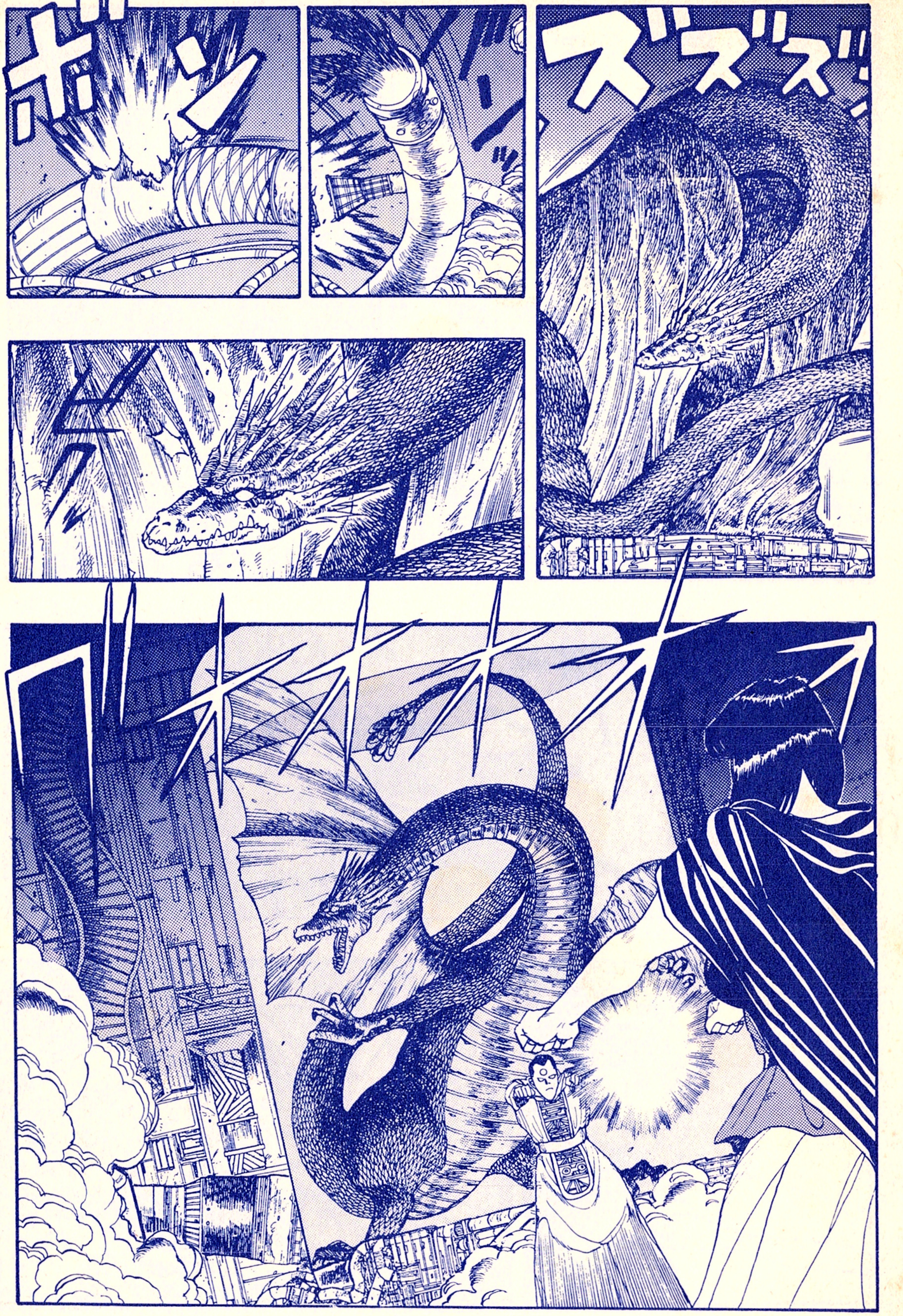
次号 Vol.16・17合併号(8月3日発売)に続く!!

●前回までのあらすじ／かつてグレイの兄弟子だったアクィナスは、妖精族の体内にあるマナを利用して神になる秘法を完成させようとしていた。シーマを救い、アクィナスの計画を阻止するため、真実の都に乗り込んだグレイだが、彼女はエルフたちの前でアクィスに手を貸すよう申し出たのだった。



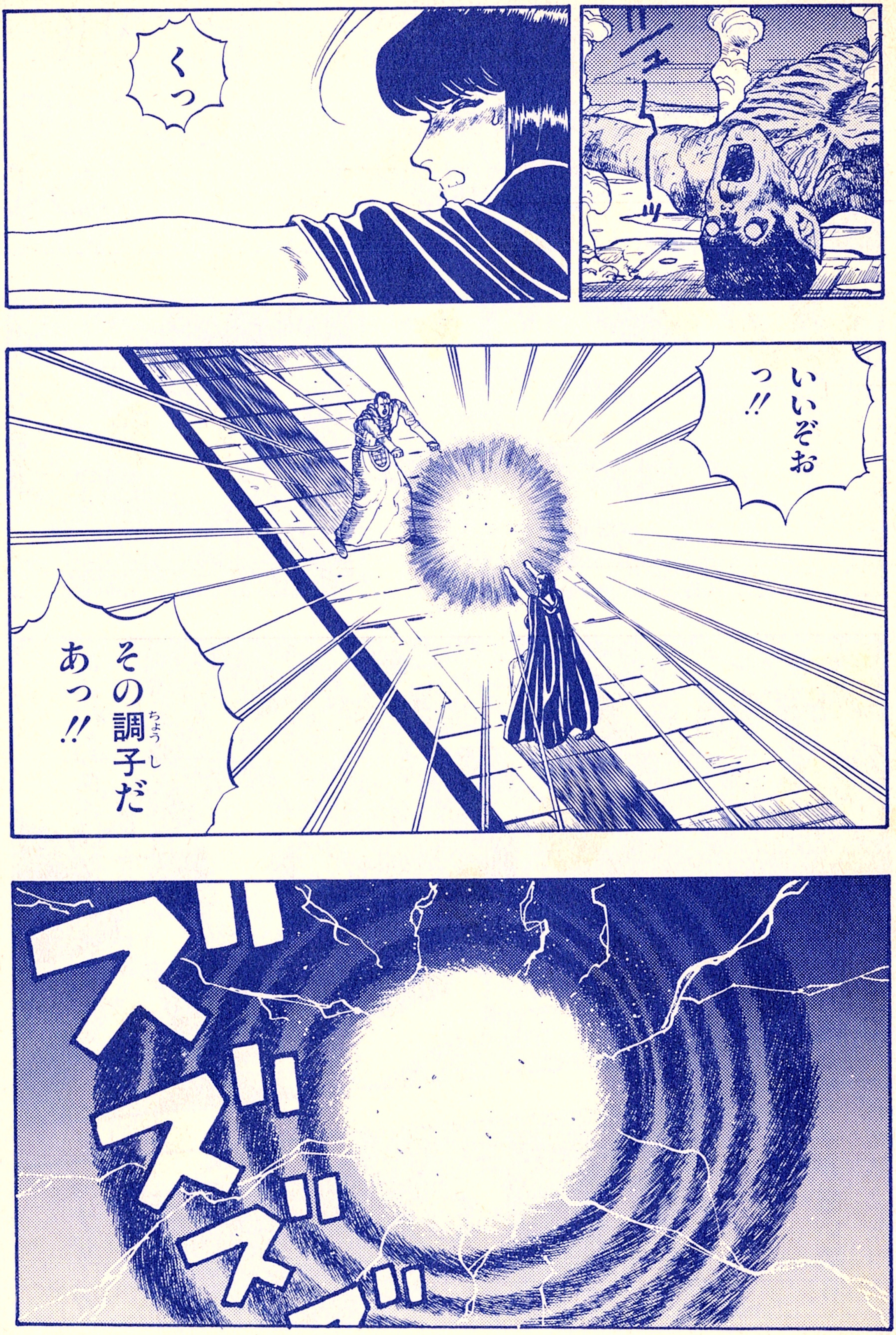


アクィナスの錬金術に、力を貸すグレイ。彼女の真意は?


ボン
ズズズ!!
ピク
グオオオオァ



気をぬくなっ!!
吹き飛ばされるぞっ!!
急激にマナを吸い出されてあがいてるだけだ!!

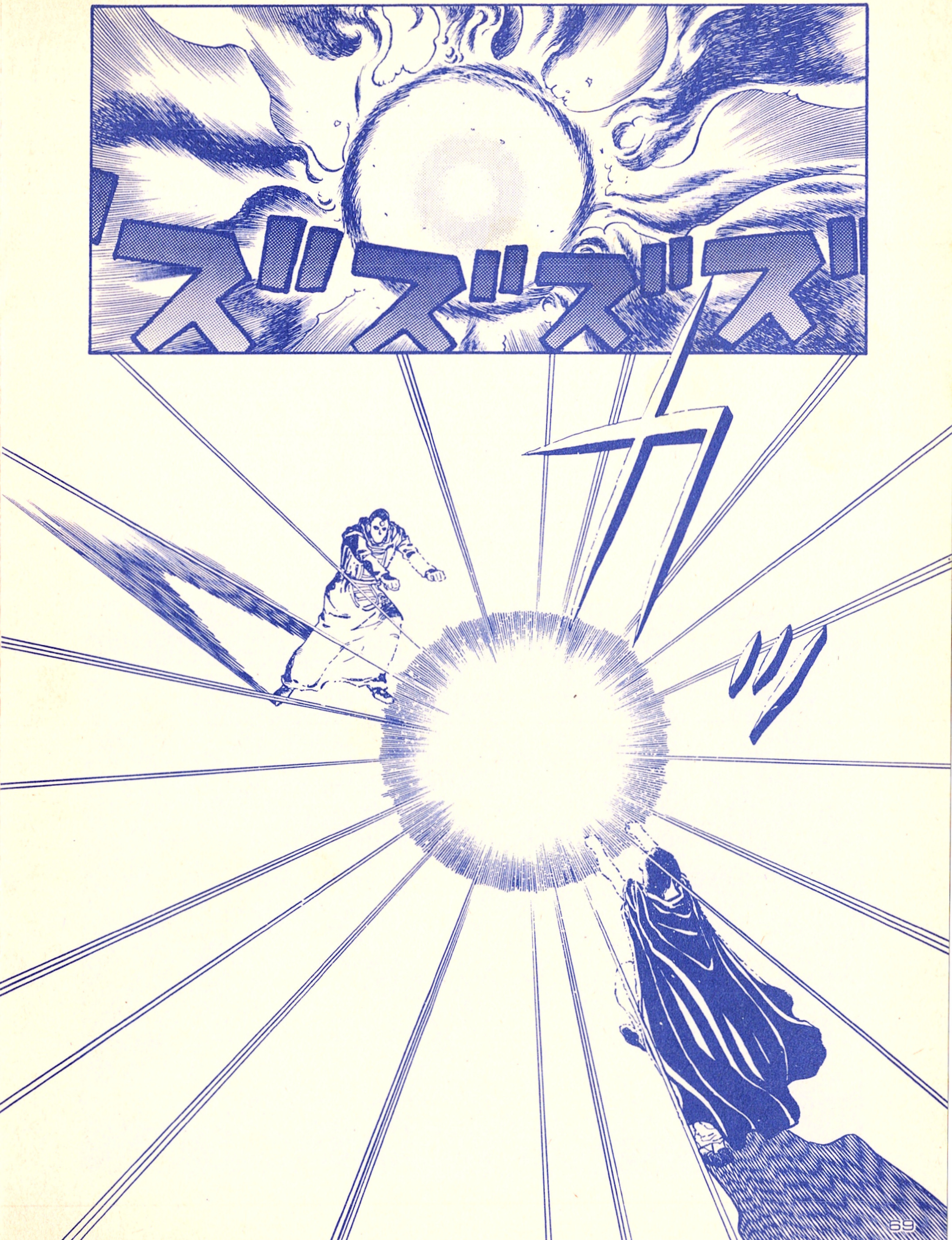

くっ
いいぞおっ!!
その調子だあっ!!
ズズズズ

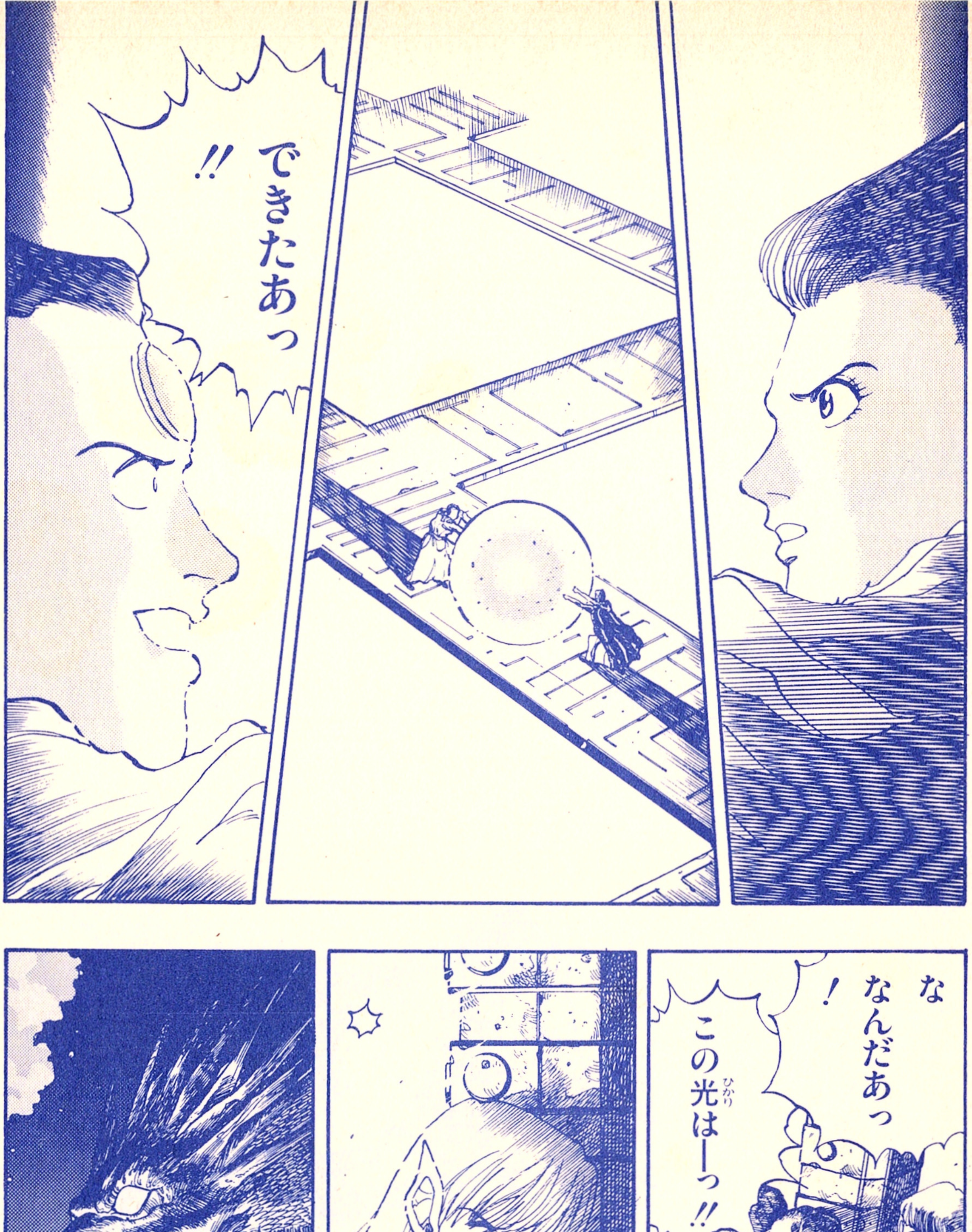


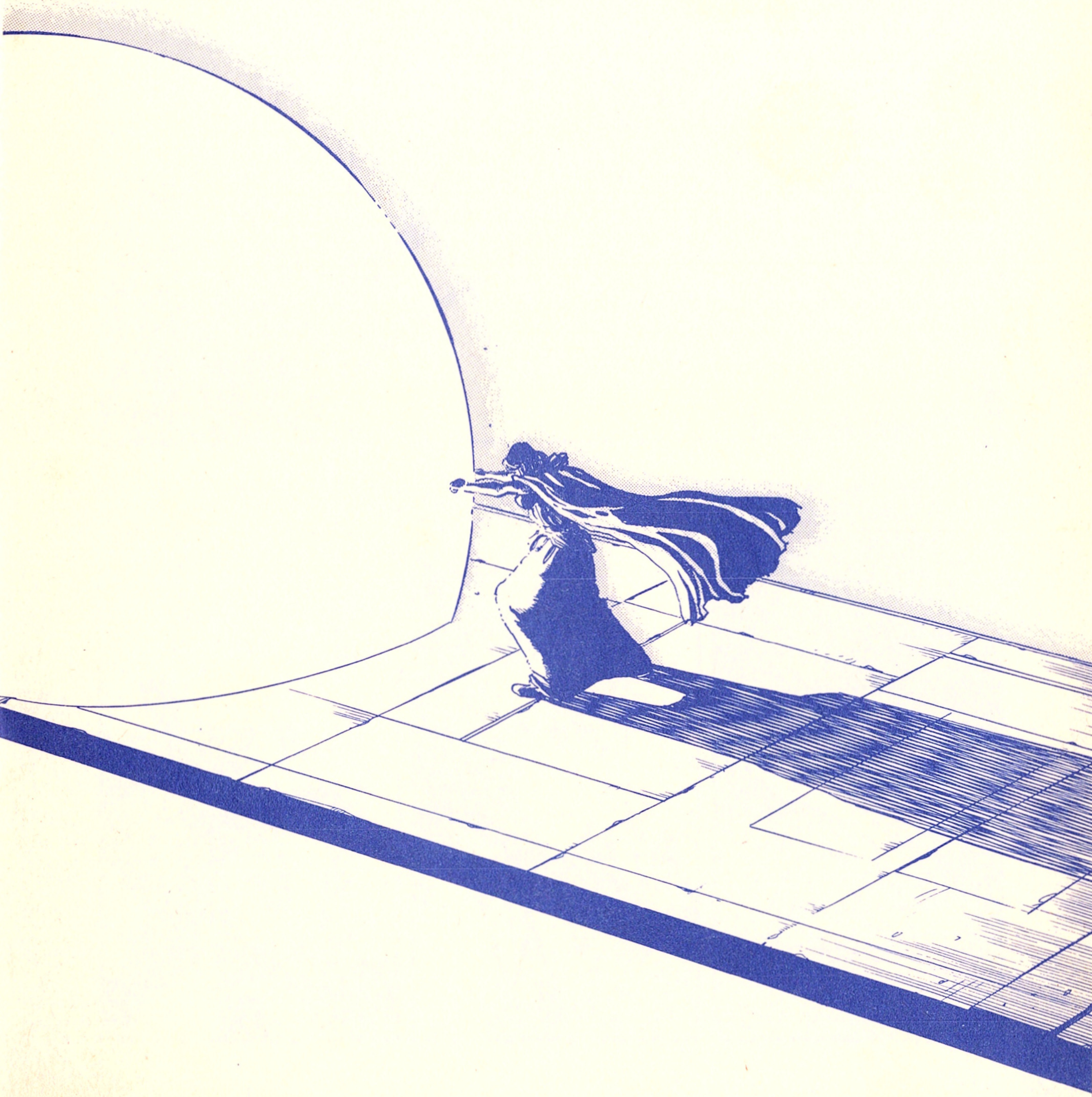
ズズズ
ん？
マ
マナが…!!
ゴゴゴゴゴ
うわあああっ
マナが…!!
俺(おれ)たちのマナが吸(す)い取(と)られてるよおっ

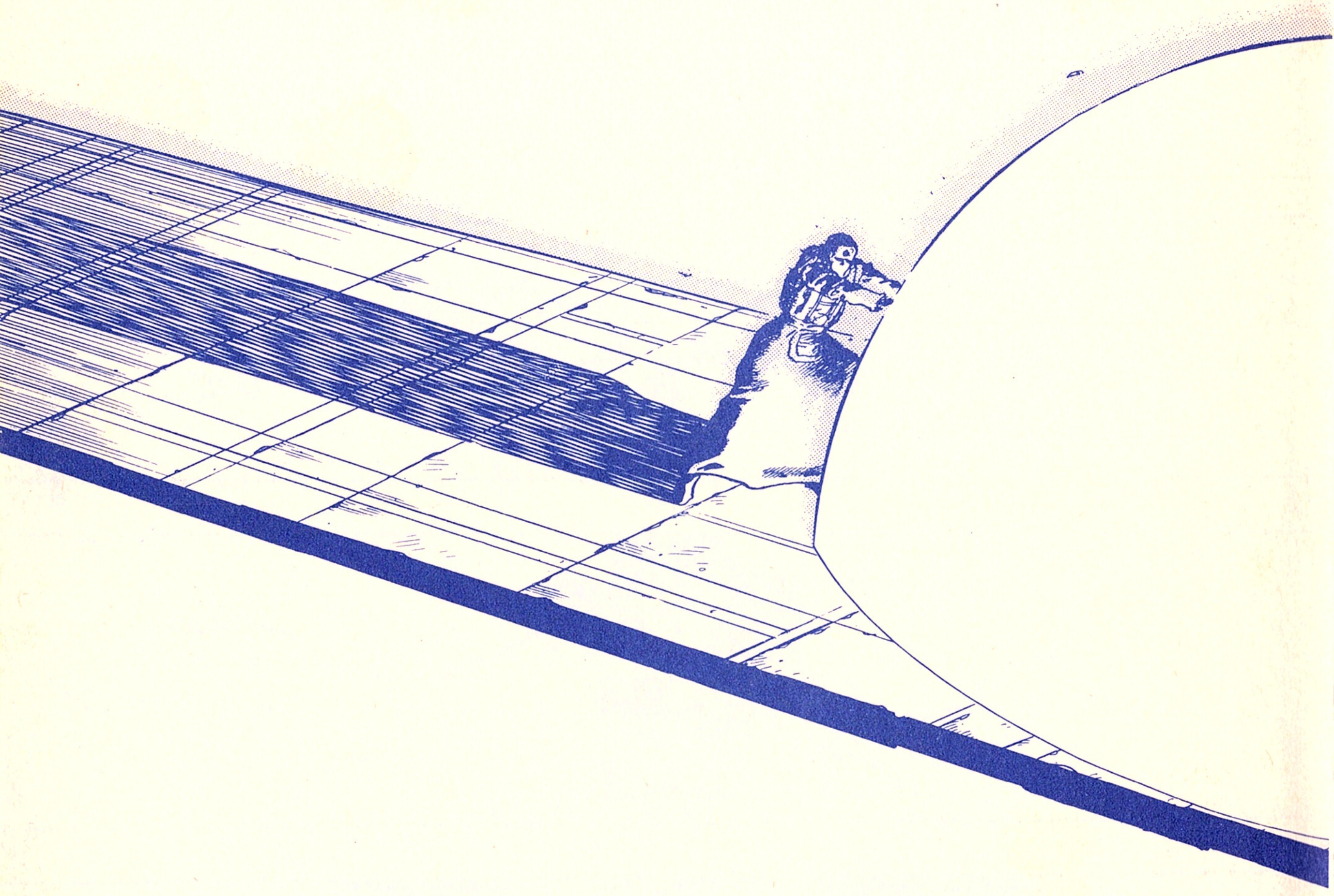


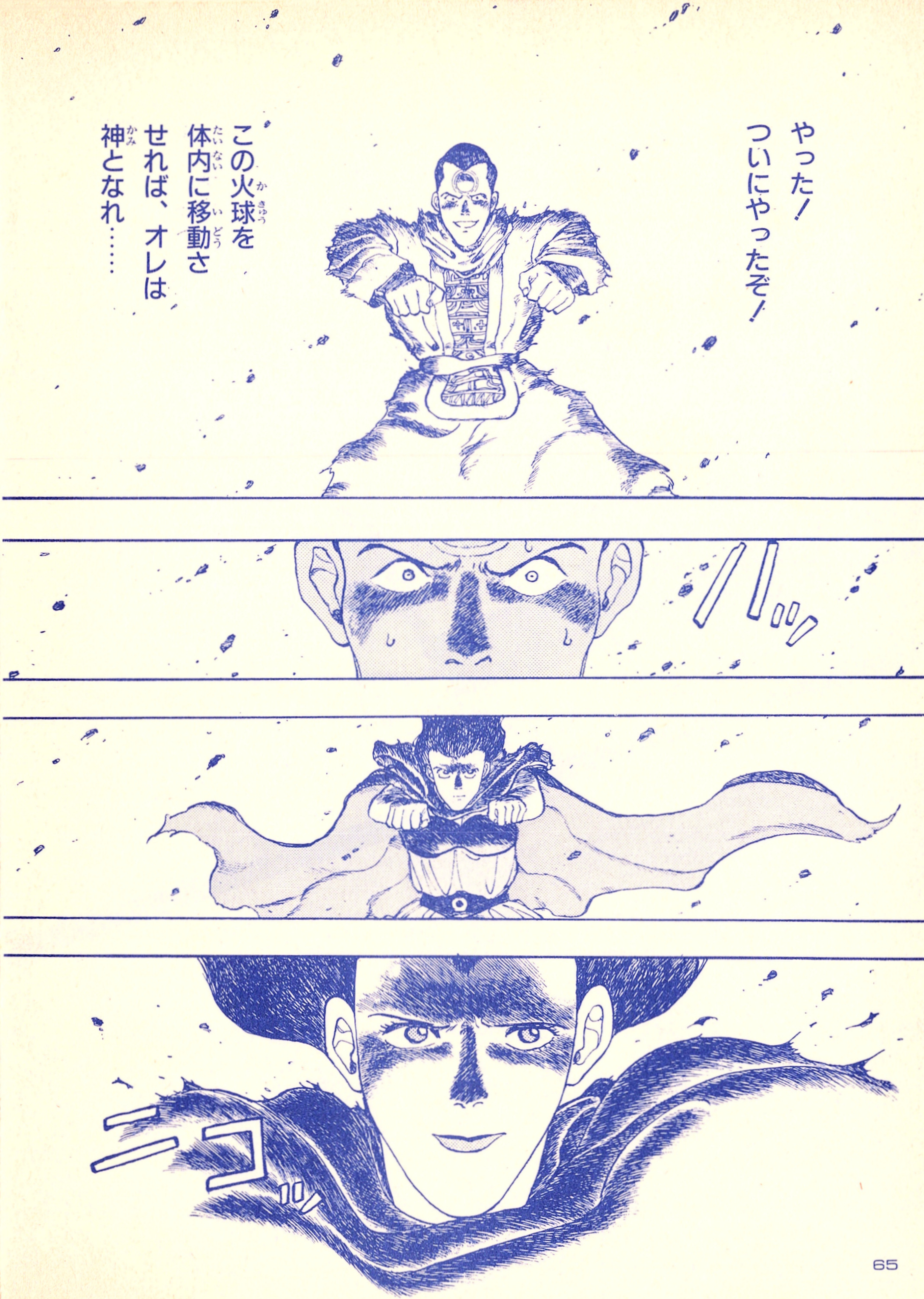
あの女…
何を…
！
グレイ
まさか…
ズズズズズ

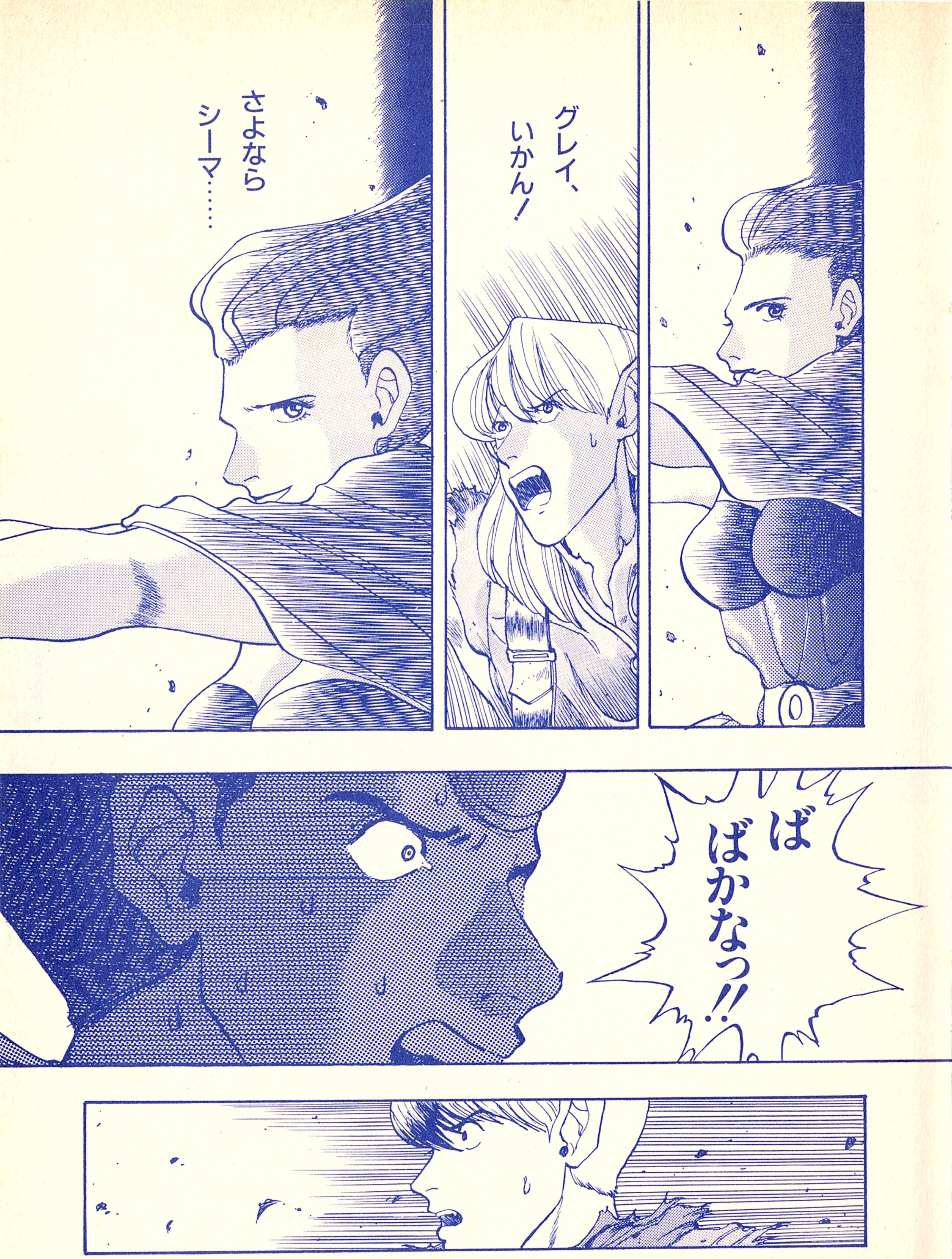

ズズズズ
カッ

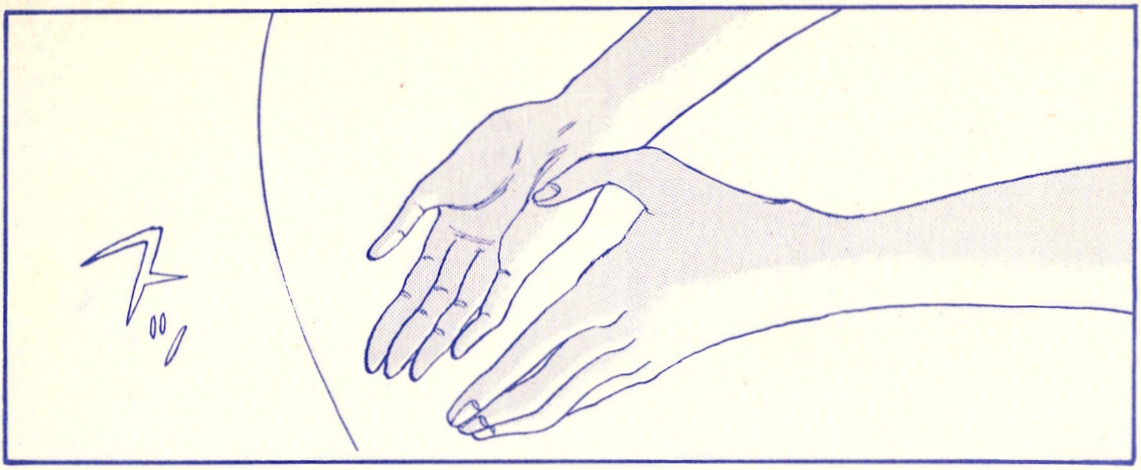

できたあっ!!
な
なんだあっ!
この光は一っ!!

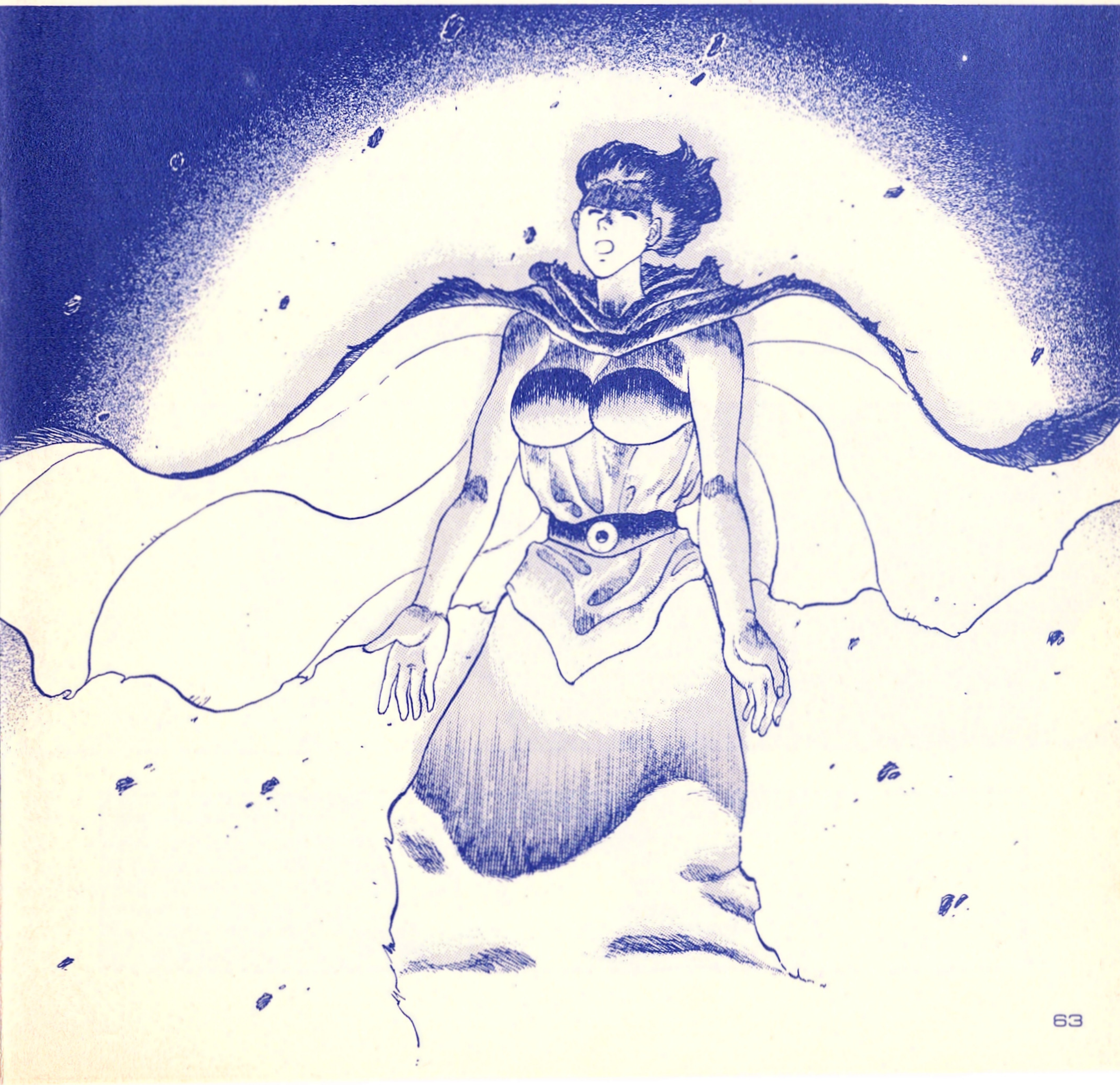




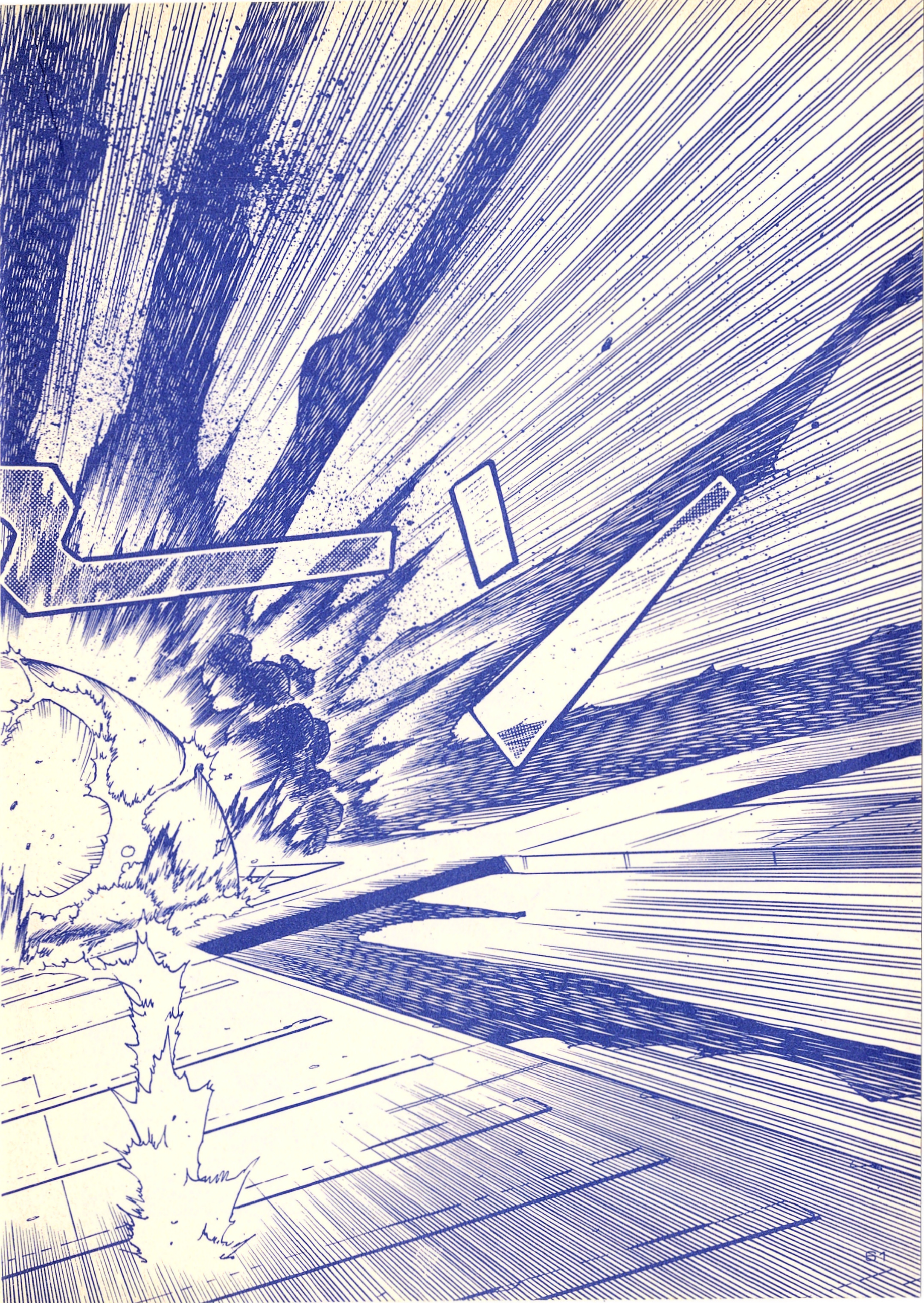

やった！ ついにやったぞ！
この火球を体内に移動させれば、オレは神となれ……
ハッ
ニコッ

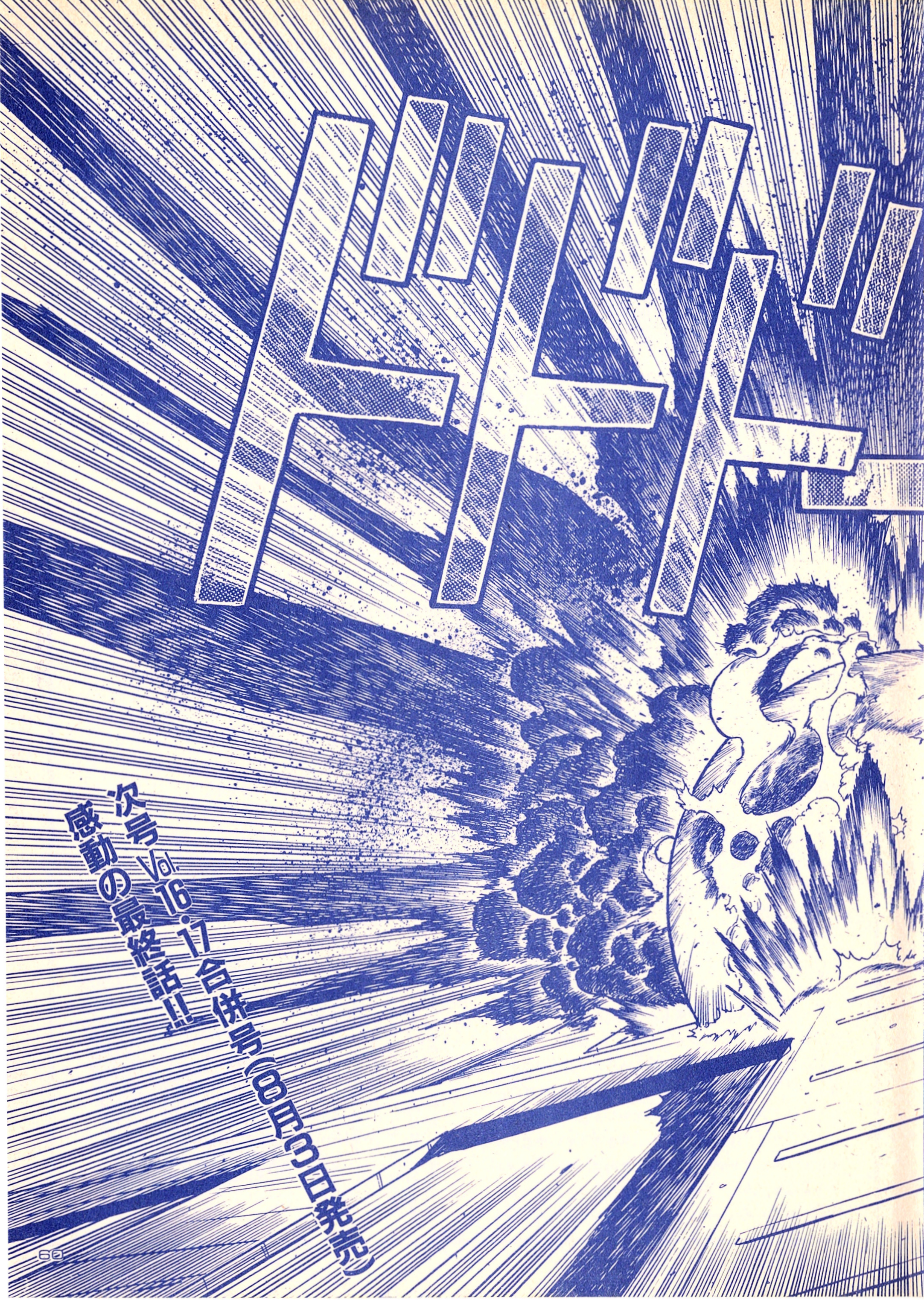

グレイ、
いかん！
さようなら
シーマ……
ば
ばかなっ!!


ス




ぎゃー!!




ドドドー
次号Vol.16・17合併号(8月3日発売)
感動の最終話!!

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

by柴尾豊太郎

この本を読め!!



第十一回『知性化戦争』

デイヴィッド・ブリン著

人は十代のときに何を読むべきか(ううむ)

人間なんてものはどうしても、十代のころ夢中になって読んだものからは抜け出せないところがある。ぼくの場合、大学に入ってから今日までいろんな本を読んでいるはずなんだけど、たとえば、今まで読んだ本のうちから、ベスト10を選べといわれれば、大学以降に読んだ本ではなくて、その内の8本くらいまでは、中学や高校時代に読んだ本になるんじゃないかと思う。

ＳＦのある小話（？）に、ＳＦの黄金時代はいつだったかという話があって、「40年代さ」とか、やっぱり「50年代だよ」なんておおいに盛り上がっていたところ「やっぱり十代」だというやつが出て、みんなううむと納得したというのがある（ちなみに、この話日本語で書くとわかりにくいんだけど、黄金時代、つまり〝GOLDEN AGE〟の〝AGE〟を時代ではなく人間の年代としたところがみそです)。

まあ、ことほどさように若いうちに何を読むかというのはそのひとの読書歴にとって、大きな財産になることは確かだ。まあ、まったく同じことが、音楽や映画でもいえるんだけどね。

ちょっと前ふりが長くなったけど、ぼくにとって、十代のころ読み耽った大切な本というのがやっぱりＳＦなんだ。

ちょうど、時代的な背景もあったんだろう。ぼくが十代の頃は、ＳＦというジャンルがすごく充実していた時代だったってことは確かだ。関係あったかどうかは知らないけど、映画〝スターウォーズ〟のおかげで、世の中はＳＦが〝ブーム〟になり、ハヤカワ文庫ＳＦは軌道にのっていた頃、おまけにいったい何を考えていたのかわからない怪しげなサンリオＳＦ文庫の創刊というイベントも重なり、ああ、それから、ＳＦマガジンの他にＳＦ宝石、ＳＦアドベンチャーなんて雑誌も創刊され、今からはとても考えられないほどの出版点数のＳＦがでて、しかもそのどれもが非常に充実していた時代なんだ。

だからというわけではないんだろうけど、とにかく、最近のＳＦのお寒い状況にはちょっと、悲しいものを感じている。

ぼくがＳＦに求めているものはとにかく読んで面白いだけのレベルがあるもの。ただ、今のＳＦにはそれだけのもの（少なくとも日本で翻訳されたものと書かれたものには）がないので、仕方なくほかのファンタジーや冒険小説にその「読みたい」気持ちのはけ口をもっていってるような気がしてならない。

で、近ごろ、これはＳＦの面白さを満喫したなというのがオラフ・ステープルドンの「スターメイカー」とデイヴィッド・ブリンの「知性化戦争」だ。

とくに「知性化戦争」はお薦めの１冊。もう本当にＳＦらしいとしかいいようのない設定を、かなりしたたかなストーリーテリングでまとめている傑作だ。きみも十代のうちに読んでいてほしい作品といってもいいだろう。



↑「知性化戦争」デイヴィッド・ブリン著 酒井昭伸訳 ハヤカワ文庫ＳＦ（上下、各680円）人類が銀河文明に遭遇したとき、すでに数十億年の歴史を刻んだ銀河文明は人類を単なる鬼っことしてとらえ、弱小種族として位置付けた。抗争を続ける銀河列強の戦乱の嵐が辺境の人類植民地に押し寄せてきた。

Wizardry II

小説ウィザードリィII

第20回 風よ。龍に届いているか

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

心の奥底の恐怖を誘い、悪夢を紡ぐ夢魔。
執拗にジヴラシアを狙う女怪を捕えるべく
精神世界の戦いが繰り広げられる。
独自の呪法を身につけたザザの
魔法陣を用いた秘術が冴える！



〔第二十章〕結界

柔らかなベッドから、俺は身を起こした。

王宮内の、俺にあてがわれた居室の中だ。豪華な装飾の施されただだっ広い室内が、微かに灯されたランプの光に淡く照らされている。

「手傷は受けましたか？」

薄闇の中から、耳慣れた声が聴こえてきた。

「いや。危ねえところだったけどな」

応えながら、俺はランプの光量を上げる。たっぷりと金をかけてあるらしい調度品の数々が、強まった朱色の光に浮かび上がった。

部屋の中央、厚い絨緞の他は何も置かれていない広い空間に、白い法衣に身を包んだザザが座っていた。

胡座とは少し違う形で足を組み、指先で印を結んだ両腕を緩く左右に広げている。結跏趺坐とか呼ばれる、異教の座法のひとつだ。

穏やかな笑みを浮かべて、ザザは足を崩した。

「精神集中にはいいんですが、続け過ぎると痺れますのでね」

そう言うザザの背後に、奇妙なものがあった。

直径二メートルばかりの、円形の複雑な紋様だ。絨緞の上に赤い顔料らしきもので描かれている。

そして、その円の内側に、牙を剥き出した夢魔が憤怒の形相を浮かべて蹲っていた。それが、今にもザザに飛びかかろうと身構える。

〝畜生！　小賢しい！　お前から先に精を吸い尽くしてやる！　お前僧侶だね。堕落させてやる！　何倍にも、何倍にもして返してやるからね！　畜生！〟

聞くに耐えない金切り声をあげ、髪を振り乱して、夢魔はザザに摑みかかろうとした。

だが、その爪が紋様の外輪から飛び出そうとした瞬間、夢魔の白い裸身に青白い稲妻が疾った。

〝かっ〟

前号までのあらすじ

神話時代の遺産・グニルダの杖の防護障壁により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン王国の聖都リルガミン市。しかし突如として原因不明の天変地異が襲い始め、王国は滅亡の一途を辿りつつあった。異変の原因を究明すべく、王国は多数の冒険者を募り、リルガミン市の北に聳える禁断の山、龍神’ル ケブレスの住まう〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索に望みを託した。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの心身を実戦経験によって飛躍的に鍛え上げ、超人的な戦闘力をもって魔物のひしめく山中の迷宮を踏破していった。中立の守護者たる’ル ケブレスは様々な魔法結界を用いて探索者の資質を試してきたが、彼らはそれらを善悪の相反する戒律を持つ者同士の協力によって乗り越え、使命の達成は目前となった。

しかし主人公ジヴラシアがチームを組むガッシュ、マイノスらの善のパーティが、残された迷宮最上層の探索に向かったまま消息を絶った。捜索隊が組織され、ハイランス率いる三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。

それと入れ替わるように、リルガミンへと帰還する二名の冒険者。だが、彼らはすでに他生物に同化・増殖する謎の生命体ゼノに取り憑かれ、奇怪な化物に変貌を遂げていた。折しも王国の統治者・ベイキ女王との謁見を行っていたジヴラシア、ディー、ザザの三名は妖獣の一体に強襲され、重傷を負いながらも宝珠とともに帰還したマイノスの援護で辛くもこれを撃退する。しかし残る妖獣は同時に冒険者の宿を襲い、残留組の冒険者を全滅させていた。

その夜、王宮では神秘の宝珠を用いた結果を報告する晩餐が開かれた。が、そこで賢者たちが告げたのは間近に迫る大破壊であった。避けられぬ滅亡を前に、ジヴラシアは迷宮に残された仲間の救出を決意する。そして深夜、悪夢の中でジヴラシアは夢魔に襲われた――。

主な登場人物

- ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ’ル ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

短く叫び、夢魔は円の内側に弾かれた。

紋様が、赤く光を放っていた。その外輪から、光の壁が垂直に天井へと伸びている。

細長い円筒形の檻が、夢の世界から抜け出した夢魔を封じ込めているのだ。

結界——それも、強大な魔力を有する悪魔系の魔物を閉じ込めるだけの力を持つ魔法結界。並の術者がおいそれと造りだせる代物ではなかった。

赤い光は直に弱まり、やがて見えなくなった。が、不可視の障壁が今も夢魔の周囲に張り巡らされているのは明らかだった。

立ち上がり、ザザは背後に軽く首を巡らせた。「こうしてしまえば、あとは私が眠っていても逃げようがありません」

〝出せ！　出せ！　おのれ——〟

懲りずに呪咀の言葉を吐き続ける夢魔を無視し、ザザはいつもの涼しげな笑顔を俺に向けた。

僧侶として冒険者になる以前、ザザは各地を旅して様々な呪法を学んでいた。

東方の異教や土着の精霊信仰、悪魔や人外の魔物を崇める邪教——リルガミンのような大都市から遠く離れた閉鎖的な地域では、今もってこのような宗教の呪術が伝えられているという。それらを研究し、現在確立されている魔法体系とは外れた呪法を編み出すという行為を、ザザの数代前の御先祖が始めていたらしい。

それを受け継ぎ、なおかつ自らが新たに会得した数々の呪術を組み合わせて、ザザは独特の呪法を身につけるに至った。

そのひとつが、この魔法陣を用いた結界だった。

俺は、籠の鳥となって足掻く夢魔に目をやった。

夢魔は、人の心の隙を衝く。

本人すら知らぬ、心の奥底の暗黒面を嗅ぎ当て、無防備な眠りの中へと入り込んでくる。そして、甘美な誘惑と、あるいはおぞましい悪夢によって深層心理を引きずり出し、その精神を堕落させるのだ。

夢の魔、と呼ばれるだけあって、この悪魔は滅多なことでは覚醒時の人間の前に姿を晒すことはない。目を覚まし、精神が夢から抜け出た瞬間に、本体は魔界へと逃げ帰ってしまう。

だが、夢魔が心に吹き込んだ毒は、楔となって精神に食い込む。そして狙いをすました相手が眠りに落ちる度、夢魔は執拗に誘惑を繰り返し、楔を深く、より深く打ち込んでいく。

誰かが傍についていたところで、夢魔は巧妙に夢の中へと潜り込む。生命ある者が睡眠を摂らねばならぬ以上、取り憑かれた者はいずれ、夢魔の手妻の前に屈服することになる。

そうして堕落した者は、もはや夢魔の誘惑に抗えはしない。夜な夜な訪れる夢魔のもたらす肉欲の虜となり、最後にはその精を全て搾り取られて無残な死を遂げることになるのだ。

放っておけば、俺もそうなるところだった。精神力に自信がない訳ではないが、特に僧侶のように神に仕える聖職者を好んで堕落させるような奴等だ。その夢魔の独壇場となる夢の世界で、いつまでも持ちこたえることができるかどうかは疑問だった。

もっとも大破壊間近いこの状況下では、夢魔の手によって快楽の限りを味わいながら死を迎えるのも悪くないと、そう考える奴もいるかも知れない。夢魔が夢の中で与える悦楽は、現実のそれを遥かに凌ぐものであると伝えられているからだ。

だが、俺は御免だった。

男としての欲望がないのではない。が、その快楽は敗北を意味する。夢魔如きに屈服するくらいなら、自ら命を断つ覚悟があった。一時の快楽で魂まで腐らせるつもりは俺にはない。

それに、まだやることが残っていた。

そこで、俺とザザは罠を張った。

俺は無防備に眠ってみせ、夢の中に夢魔を誘う。

その間ザザは精神集中によって、夢魔に気取られぬよう思念を空白に保っていた。

無の境地——種々の呪術を習得するために、幼くして特殊な精神修行

を積んできたザザだからこそ可能な芸当だった。同じ室内に無造作に座っていたザザが、夢魔にはただの置物のように感じられただろう。俺に悪夢を送り込みながら、夢魔は外部に対して完全に無防備となっていた。

思念を無の薄皮で包みながら、ザザは夢魔の造る夢の外側に徐々に精神の檻を張り巡らした。俺を支配するための精神世界が包囲されることにより、夢魔の意識は逆にザザの支配下に置かれることになった。

無意識のうちに、夢魔の肉体は魔法陣の内側に誘導されていった。しかし、悪夢を紡ぐのに文字通り夢中になっている夢魔は、自分自身が主導権を握っていることを毛の先ほども疑ってはいない。

完全に魔法陣に取り込んで、ザザは結界を完成させた。その瞬間に俺の精神は夢から解き放たれ、夢魔は初めて自分が罠に嵌まったと気づいたのだ。

危険なやり方ではあった。

夢の中でさえ、夢魔は俺を傷つけることができる。精神に極度の刺激を与えることによって、ある程度の肉体的損傷を生じさせられるのだ。今朝俺の頬に掻き傷が浮いていたのもこれで、夢の中の傷が現実の肉体に跳ね返る。相手の精神力を利用した、より直接的な呪殺という訳だ。

結界を閉じる前に気取られていたなら、夢魔は俺を弄ぶのを止めて全力で精神攻撃をかけてきただろう。心臓に圧迫をかけるイメージを送り込まれれば、運が悪いと自分で鼓動を止めてしまいかねない。

だが、ザザはうまくやってくれた。魔法陣の中では、夢魔はもはや針を失った毒虫以上に無力だった。

俺は軽く弾みをつけてベッドから下りた。それを見た夢魔がまたひとしきり喚き始める。

〝もう一息、もう一息だったのに、畜生！　お前もあたいに罠をかけたね！　このずる賢い破戒坊主と一緒に！　糞！　このお返しは、きっとしてやるからね！　この薄汚い――〟

「何とかならねえのか、こいつ？」

俺は渋面を造ってザザに訴えた。「声を聞かされるだけで厭になっちまったよ」

ザザがくっくっと笑った。

「同感ですが、これくらいは我慢して下さい。それに、声が聴こえないのではこの先不都合になりますからね」

そう言って両手で複雑な印を結び、ほとんど抑揚のない呪文を低く唱える。

途端に、赤い紋様から一筋の雷が噴き出し、魔法陣内の空間を青く切り裂いた。

〝ひいっ〟

天井に駆け昇る稲妻に皮膚を灼かれ、夢魔の呪咀は悲鳴に変わった。

「この魔法陣は、紅玉の粉に私の血を混ぜた顔料で描いたものでしてね。術者の血を含むと、障壁の強度が飛躍的に高まるんですよ」

何事もなかったように、無邪気にすら見える表情でザザは言った。

「今の雷は結界内の力をやりとりするだけですが、障壁の力が強ければ相当な破壊力をもたらすことになります。触れただけでも、痛みはかなりのものでしょうね。威力の調節が効きますから、色々と尋問するには最適でしょう」

「今のは？」

「最弱です」

背を向けてはいたが、むしろ夢魔に聞かせるための説明だった。

掠めただけで激痛を生じさせる電撃に驚愕を隠し切れぬ夢魔は、この脅しで明らかに怯え始めた。夢の中よりも美しさの衰えた感は否めないその貌が、より一層白く引き攣っている。

〝な、何をするつもりだい？〟

「聞こえたでしょう？　少々訊きたいことがありましてね」

ゆっくりと振り返りながら、ザザは慇懃な態度で言った。「大して難しい質問ではありませんよ。それに、絶対に答えられる筈です。どうしてジヴを誘惑し、堕落させようとしたのか――それだけですから」

〝そんなこと、当たり前じゃないか！　あたいは夢魔だよ！　お前みたいな聖職者や、あっちの男のような連中を骨抜きにするのが生き甲斐な


Masaki

んだ。それがたまたま――〟
ばちっ、と結界内に放電が起こった。夢魔には触れなかったが、青白い閃光に短く叫び、躰を硬直させる。
ザザは、両掌の印を解いた。
「残念ながらそんな話は通じません。ここが旅先の野営地や山深い寒村だったら、それでも充分信じてもらえたでしょうがね」
優しく、恋人に囁きかけるような声音だった。
夢魔はザザを凝視し、人間の女そっくりの貌を歪ませて身を捩った。人の心を持たぬこの魔物が、恐怖に取り憑かれている。
俺の位置からは、魔法陣の前に立つザザの表情は見えない。が、この男がどんな顔を夢魔に向けているのか、俺は知っていた。
穢れのない子供が浮かべるような、邪気のない笑顔だ。戦闘において圧倒的な優位に立った時、ザザは決まってそんな表情を見せる。
幼い子供が粘土細工を叩き潰し、虫の手足をもぎ取りながら浮かべる罪のない笑み。他者の生命をその手に握りながら、それを全く意に介してはおらぬ無邪気な笑みが、悪魔すらも震え上がらせているのだ。
それが相手に与える恐怖を計算したものか、それとも無意識のうちに滲み出たものなのか、俺には判らない。ただひとつ言えるのは、相手が女の姿を取っていようと、ザザは敵対者に対して容赦をしないということだった。
俺ですら鼻白むほど、ザザは敵に対して非情になれるのだ。敵であれ、女子供には手出ししない――そんな安っぽい博愛精神を、ザザはひとかけらも持ち合わせていなかった。
いつだったか、迷宮内の隠し扉を突き止めるため小妖精を捕えたことがあった。その際、ザザは口を噤む小妖精の指を一本ずつ折り、嘘を教えた時は腕を折ってその場所を吐かせた。
その後小妖精をどうしたのか、パーティの誰も見ていなかった。が、恐らくザザは殺しただろう。そいつが無抵抗であってもだ。
逃がしたところで、その小妖精は恩義など感じない。それに深手を負ったそいつを見つければ、仲間は怒り狂って俺たちを探し始めるだろう。
敵への情けが味方を窮地に追い込む可能性がある訳だ。
ザザは、道徳観念が根底から異なる宗教呪術を幾つも学んできた。その過程でどんなことがあったのか、これまでに語ったことはない。
だが、ほとんどの宗教は異端の信仰を拒む。正義――言い換えれば善――の名のもとに、異端者は老若男女を問わず狩り立てられ、無慈悲に殺されるのが常だ。
狩る者と、狩られる者。時には入れ替わる両者の立場から呪術を吸収してきたザザにとっては、自己満足に過ぎぬ博愛主義など、邪魔になりこそすれ役には立たぬものだったのだろう。
それを冷酷と、俺は言わない。
敵ではない者には、ザザは悪の戒律とは思えぬほど甘い。善の連中に対してさえ、決して礼を失する態度は取らない。まるで、敵に対する厳しさを、それで償うかのように。
仲間を思うが故の、敵への烈しさ。それが掴みどころのないザザの内面だと、俺は思っている
竦み上がる夢魔に、ザザは続けた。
「ここは歴史ある聖都リルガミン。いくら杖の加護が消えようと、魔を畏れ、厭う多くの人々の思念が長年に渡って蓄積し、街自体をひとつの結界としています。あなたのような低級な悪魔はとても近づけぬ聖地である筈なのに、よりによってその中心であるここ、王宮にまで姿を現した――それはつまり、狙いはあくまでこのジヴだということ。そのためにあなた以上の力を持つ存在が力を貸し、何としてもジヴを堕落させようとしている――違いますか？」
問われた夢魔は、蒼白な貌を激しく横に振った。が、見開かれた瞳がザザの推論の正しさを裏づけていた。
「答えなさい。あなたがた悪魔が何を企んでいるのかを」
ザザは再び印を結び、先刻とは異なる呪文を、唱えた。
〝があああああ――〟
今度はもっと太い稲妻が幾条も噴き上がり、夢魔の躰を次々と突き抜けていく。部屋全体が断続的に白く照らされる。

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

〝い、言う、あがっ、ガッ、ミ、みんな話すから、や、かかっ、止めて――〟

電撃に裸身を痙攣させ、白目を剝きながら夢魔は絶叫した。

たっぷり一呼吸おいて、ザザは雷を止めた。

無言で、魔法陣の上に這いつくばう夢魔を見下ろしている。

肩で息をする夢魔は俺とザザを見上げ、苦痛に表情を歪ませて身を起こした。

〝……は、話すから、もう止めておくれ〟

「どうぞ」

〝あたいは、命令されただけなんだ。あたいらの力だけじゃこの街に入れないけど、あいつの魔力は思念の壁を破って――〟

「狙いがジヴでなければならない理由と、それを命じたのは誰なのか。訊きたいのはそこです」

〝それは……言う、言うよ！〟

一瞬ためらいを見せた夢魔だったが、ザザの腕が動くのを見て慌てて言葉を継いだ。この短時間に夢魔を恐怖で支配したザザの手並みは、やはり大したものだと言わねばなるまい。

夢魔は、俺を指差した。

〝その男は邪魔なんだよ。放っておくと、まずい。だからあたいが骨抜きにしちまおうってことになったんだ〟

「誰にとって邪魔なんです？」

〝あたいら悪魔にとってさ。だから上の連中もあいつに力を貸しているん――〟

夢魔の言葉が途切れた。

「どうしたんです。話はまだ終わっていませんよ」

ザザが印を結ぶ仕草を見せた。夢魔の顔に怯えの色が疾る。

だが、夢魔はザザを見てはいなかった。

俺のさらに後方、部屋の隅を白痴のように見つめているのだ。

〝お、お許しを――喋ってない、喋っていません！　ああ、それだけは……〟

夢魔の視線を追おうとした瞬間、室内の温度が上昇した気がした。

「避けろ！」

俺はそう叫ぶのが精一杯だった。振り向きざまに飛び退る目の前を、何かが空気を焦がしながら通り過ぎていく。

俺の叫びが届くと同時に、ザザは横っ飛びに身を躱していた。もし一瞬でも躊躇していたら、避けられなかったタイミングだ。

それは、炎だった。

何もない筈の暗がりから、凄まじい迅さで噴き出した高熱の炎。それは蛇のようにくねりながらザザを掠め、魔法陣へと伸びていく。

次の瞬間、夢魔は灼熱の鞭に貫かれた。

（次号に続く）

久し振り。この頃『ゴルフJAPANコース』に凝ってるベニ松です。ディスクファクスでトーナメントが行われていた三年前には、どうにも好きになれなかったゴルフなのに、何故なんだろう？　そう思って当時の必本を引っ張り出してみたら、トーナメントのトップスコアが4ラウンドで87アンダー！　100位でさえ52アンダーとあってはとても太刀打ちできるものじゃあない。今でも1ラウンドのベストスコアが15オーバーなんだから。

まあ、トーナメントが終わった今だからこそ純粋に楽しめるんだと思う。4ラウンドの打数差を考えると戦意喪失するからね。

それに、昨今のゴルフブームも影響があるのかも知れない。子供の頃、日曜日の午後はゴルフ中継で親父にテレビを占領され、随分と腹を立てていたものだったのに、近頃ではカップインしそうなアプローチショットに「おおっ」なんて叫んだりして。

好みがオヤジっぽくなったのかなあ。不安だ。

ところでその、昔の必本を見ていて、驚いた。三年前の三月、通巻20号前後の必本は、何と僕がここで仕事を始めた頃なのだ。やった仕事が、また凄い。ジャレコの『妖怪倶楽部』ポニーの『Dr.カオス』に、バンダイの『プロゴルファー猿』など、伝説的なクソゲーがズラリ。記事は今読み直すと泣きたくなるような文体で、『プロゴル猿』に至っては写真マンガなどをやっている。あっ、保存してる人はお願いだから読み直さないで下さいッ。

その必本が、今号で通巻百号を迎えるそうで。

感慨深いものがありますなあ。その間、色々なことがあったっけ。

去年の十月に始まったこの『風よ。龍に届いているか』も連載二十回。北海道旅行中に書き始めて、もう十ヵ月になる。

ところが考えてみれば、小説の中ではまだ物語が始まってから三十時間ほどしか経過していなかったりして、こりゃ驚き。

これからも、よろしく。

こんなビデオの楽しみ方もあるね。きみはもうチェックずみ!?

『赤ちゃんに乾杯!』◀▶『スリーメン&ベイビー』

▶似たよーな内容で、あまり時期をおかず公開されたのが不思議だった作品。

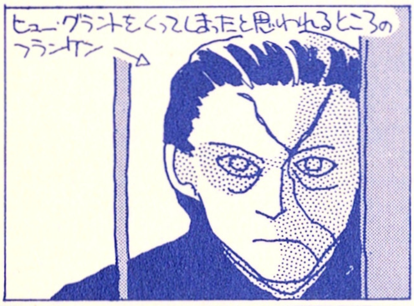
▶——と思ったらやっぱり同じものでした。
フランスであまりにウケちゃって、思わずアメリカでも作っちゃったらしい。
アメリカ版でもフランス版同様、コリーヌ・セローが監督する話もあったらしい。

▶が、Mr.スポックが撮りました。





『ゴシック』◀▶『幻の城』



▶これもあまり時期をおかずに公開された詩人のバイロンを扱った作品。
かくしてメアリーの「フランケンシュタイン」は生まれたのであった。

▶前作「マーラー」で「ベニスに死す」のパロディをやって笑かしてくれたケン・ラッセルはやっぱりみょ〜なんだ……。

▶「幻の城」のバイロン役はあの「モーリス」に出てたヒュー・グラント。
私はそれだけで観に行った!!

▶が、悲しい事に彼よりフランケンシュタインの方が印象的だった!

『オペラ座の怪人』(サイレント)◀▶舞台◀▶『ファントム オブ パラダイス』

▶舞台は超ロングランもの。
日本でも「四季」でおなじみ。

▶「オリジナリティに欠ける」とささやかれるデ・パルマではありますが、「『アンタッチャブル』より『ファントム〜』だよな」とゆー奴もいたりするんだな。私のまわりには。

▶モノクロは好きだけどサイレントに慣れていない私はビデオを観た時、と—っても困った。
「う——ん見づらい」。(テンポが合わなくてさ….)

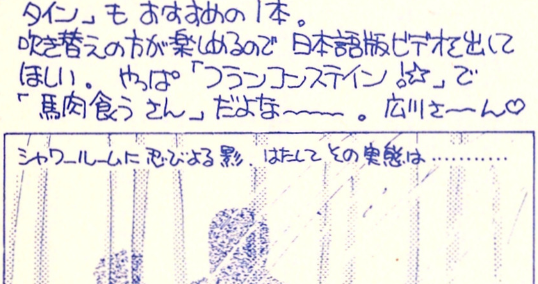


▶哀しいお話でした。怪人さんがかわいそうでした。女がイヤな奴でした。「ザ・フライ」を観せてやりたい。

『鳥』・『サイコ』◀▶『新・サイコ』

▶「サイコ」におけるあのシャワールームでの殺人。ふりむくたびに数が増える「鳥」の1シーン。
「新・サイコ」でパロってくれてます。

▶メル・ブルックスものは他に「ヤング・フランケンシュタイン」もおすすめの1本。
吹き替えの方が楽しめるので日本語版ビデオを出してほしい。やっぱ「フランコンステイン!☆」で「馬肉食うさん」だよな———。広川さ—ん♡

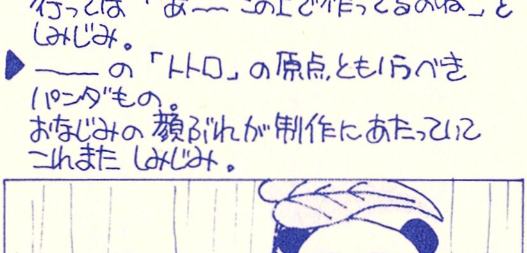


『となりのトトロ』◀▶『パンダコパンダ』

▶環境は違うもののあの子達のおかれている状況には私も思いあたるふしがあって涙ものでした。めいちゃんを他人と思えなかったりする。
宮崎アニメの中で1番好きだったりする♡

▶近所にあるスタジオ・ジブリの下の喫茶店へ行っては「あ〜〜この上で作ってるのね」としみじみ。

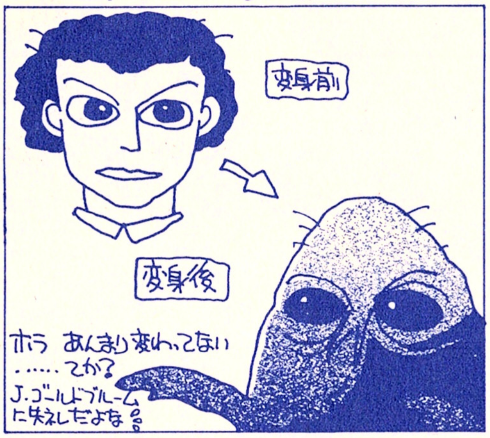
▶———の「トトロ」の原点ともいうべきパンダもの。
おなじみの顔ぶれが制作にあたっていてこれまたしみじみ。



〔夏休み特別企画〕
見くらべてみるとおもしろい　おすすめビデオガイド

松本千秋

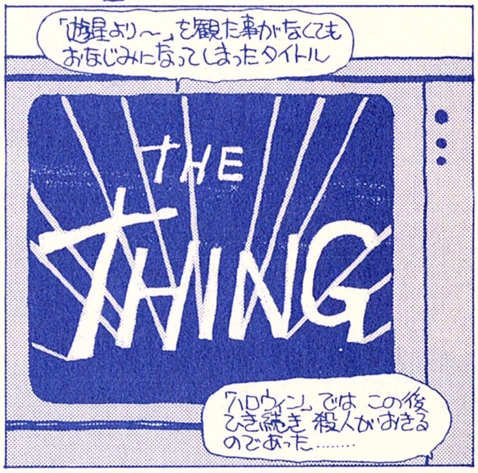
『ハエ男の恐怖』◀▶『ザ・フライ』



▶撮映技術が進んでいるので、リメイク版が前作よりハデなのは当然なんですが、クローネンバーグの手にかかると こーなってしまうんです。
昨年公開の「戦慄の絆」も あーなってしまうんです。
▶友人Aは これを観て「『ハエ男～』なんてかわいいもんだったのね」と顔をひきつらせた。
▶友人Bは これを観て 泣いた。
▶確かに ベロニカさんの 献身的な姿には心打たれます。　ふつー あそこまでやるか！？
もっとも 変身前から ハエっぽかった男ではあったが……
……………………。
▶「愛」って すごい……。

『遊星よりの物体X』◀▶『遊星からの物体X』

▶↑同様、カーペンターの手にかかると こーなってしまうんです。犬がドカーン☆ なんです。しくしく…。
犬がやられるシーンも あそこまでアレンジしてしまうのは すごい!!!
▶「遊星より～」をTVで観てる、というシーンが「ハロウィン」の中にありました。→
あれは予告だったのでしょーか。
▶「遊星から～」の公開時、グロだ何だといわれましたが、私のまわりには これのビデオやらレーザーを しっかり持ってる奴が何人かいる。
▶共に マニアが多そうな 名作。
▶▶「遊星より～」って どーも北極の話らしいんですが…
北極？ あれ？？？？？
あんな広い所あるのかな――……よく知らないけど。
「遊星から～」は 南極でしたよね～。たしか…。
「南極物語」と見くらべても楽しいかもしれない。あはははは



『リトルショップ オブ ホラーズ』◀▶『リトルショップ オブ ホラーズ』



▶個人的には オリジナル版の 歯医者さんが 好きだったりする。
……ただでさえ 歯医者さんって こわいのに……。
▶J.ニコルスンも出てくる!! 「歯医者さん大好き♡」「麻酔をかけずに歯を抜いて！」とゆー 変な患者さんの役でした…………………
▶フランク・オズが 手がけただけあって リメイク版の オードリー2は圧巻。
ちっちゃい頃 指から血をチュッパチュッパ吸う姿は はっきりいって かわいい！☆
▶オリジナル版の方が こわかったよーな気がするのは リメイク版の主演がリック・モラリスだったせいだろーか……。
▶―あれ？ これってホラーじゃなくてコメディでしたっけ？

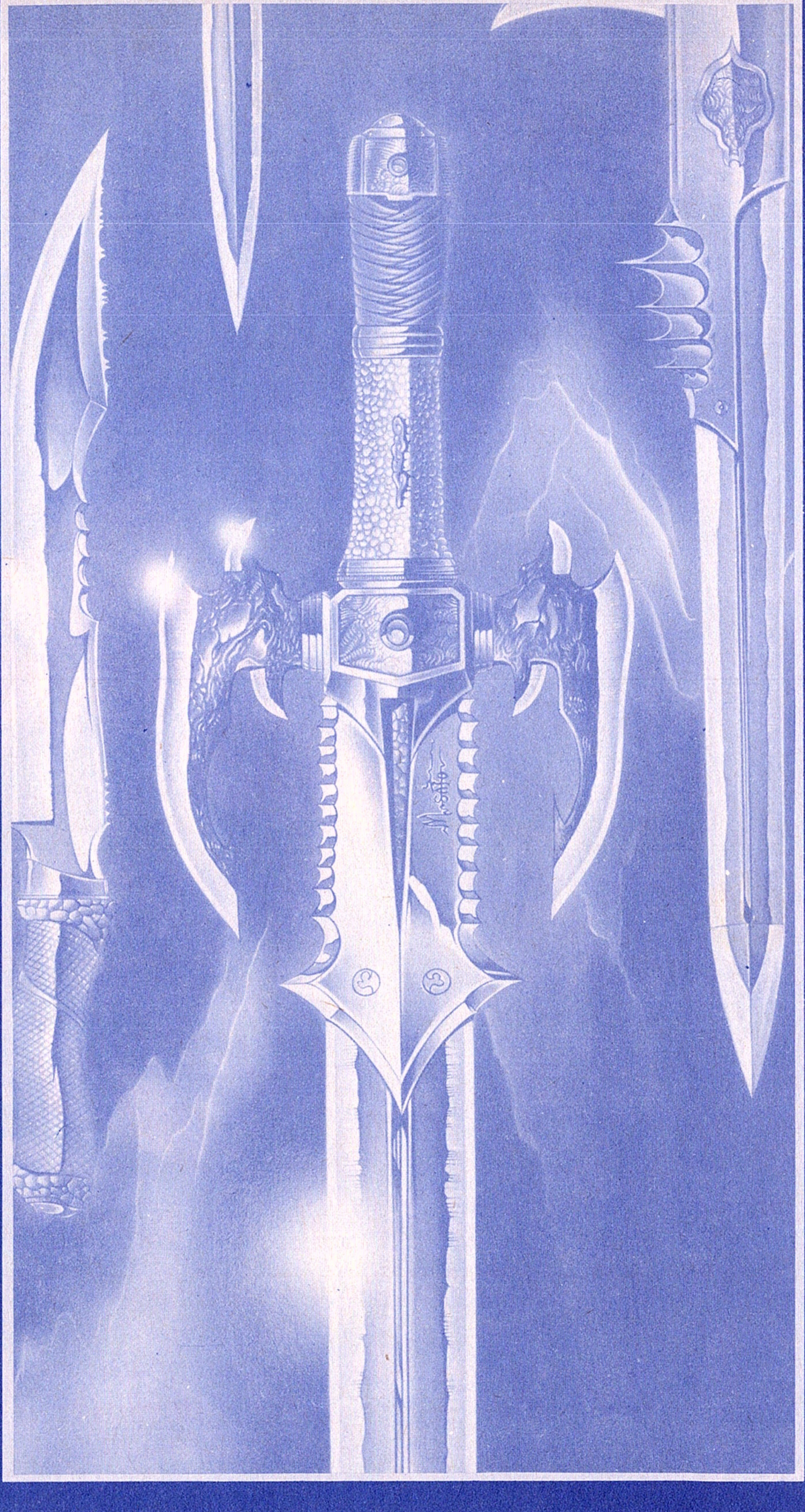



ヴァルハラの木が去った後も大喰
らいは止まらなかった・・・・・。私、
グレイ・サバトはシーマと2人、
大喰らいを止める術をさがす旅に
出て、すでに1年が過ぎていた…
捧げる歌II
DRAGON LORE


9月上旬
緊急発売!!
最後の竜に
本誌連載の傑作ファンタジーコミック、人気に応え早くも単行本化!
妖精族(エルフ)のシーマ、女魔法使いグレイの新たなる冒険がここに、始まる!!
竜の伝承(ドラゴンロア)、その秘密と衝撃が、間もなく君の心をとらえる。
作・外薗昌也
原作・手塚一郎

特報!! 小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著 絶賛発売中!! 書店へ急げ!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆!新たなウィズ世界に御期待ください!



▶ファンタジーランドは
(P102)からお読み下さい。